

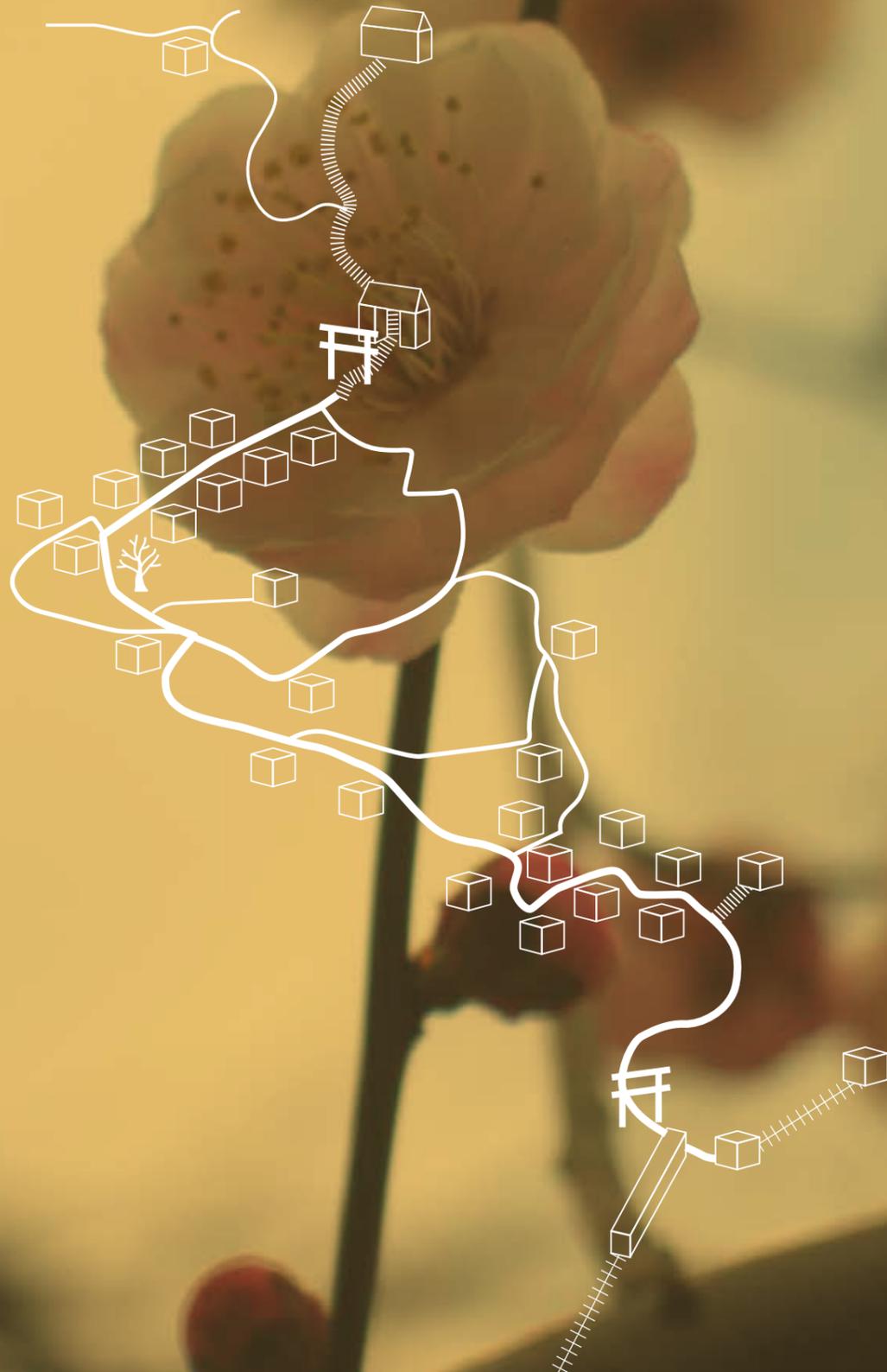
アートがこの地にできること
What can art do for this land

OME ART JAM



2016青梅アート・ジャム

梅に捧げる



INDEX

目次

2016 青梅アート・ジャムコンセプト 1P

オープニングレセプション・パーティー 2P

青梅市立美術館 展覧会

「梅に捧げる」展 梅にちなんだ作品展 3P

作家紹介 青梅市立美術館 (五十音順)

■ 青野 正 5P

■ 伊藤 光治郎 6P

■ 井上 廣子 7P

■ うるまでるび 8P

■ エバレット・ブラウン 9P

■ 海老原 露巖 10P

■ 江見 高志 11P

■ 奥野 誠 12P

■ 塩野 圭子 13P

■ 杉本 洋 14P

■ 鈴木 寿一 15P

■ 田中 毅 16P

■ 平井 一嘉 17P

■ 山口 幹也 18P

陶芸ワークショップ 梅をテーマに器を作ろう!

「梅をテーマに茶碗を作ろう」 19P

「梅をテーマに白いお皿に絵付けしよう」 20P

御岳山 野外彫刻展 21P

展示処 青ジャム 22P

石臼ワークショップ

保存食パーティー

作家紹介 御岳山 (五十音順)

■ 阿部 静 23P

■ 池田 菜摘 24P

■ 鈴木 ひろみ 25P

■ 長倉 陽一 26P

山頂カルチャースクール

「御岳山を描こう」 27P

「能を学ぼう」 28P

青梅市立美術館 市民ギャラリー展示

■ 第6回東日本大震災義援展 29P

■ 社会福祉法人 埼玉医療福祉会 光の家療育センター作品展「感じるままに」 30P

■ 杉の子彩々展 31P

■ 明星大学生涯学習陶芸講座展 31P

■ ほとけさま乃かたち展 32P

■ 梅の小品展 33P

■ 梅の写真展 ワークショップ作品展示 34P

ギャラリートーク 35P

メッセージ 51P

Special Thanks 52P

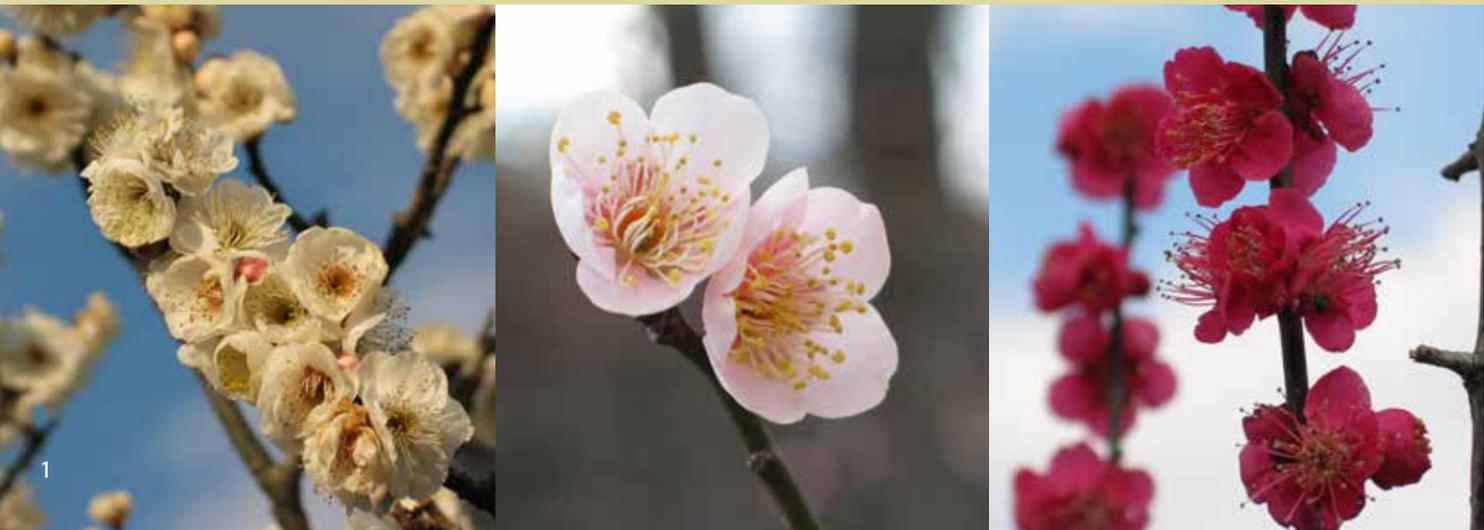


2016 青梅アート・ジャム コンセプト

「梅に捧げる」

この里の梅の木は、はるか昔から人々の営みとともに在りました。春の訪れとともに咲くたくさんの花は、美しく里を彩り、梅雨前に実る青々とした果実は梅干しや果実酒など、いろいろな食べものへ手作りされるなど…。梅の木は季節の移り変わりを知らせるとともに、生活の中にさまざまな恩恵をもたらした大事な役割を担ってきたのです。しかし数年前に、そんな大切な梅の木に重大な感染症が発見され、惜しまれつつも青梅

の里からその大半が失われるという出来事がありました。梅の木の存在とはどんなものだったのか、在りし日の梅はどんな姿をしていたのか、当たり前にあったものが無くなることとはどういうことなのか…。参加作家がそれぞれのアプローチで、今はなき「梅に捧げる」、それが2016年度の青梅アート・ジャムのテーマです。



オープングレセプション オープングパーティー

9月17日(土) 15:30～17:00、18:00～
会場：青梅市立美術館、Dining & Gallery 繭蔵



<出席者(敬称略)>

青梅市長 浜中啓一
青梅市教育委員会教育長 岡田芳典
青梅市教育委員会教育部長 藤野唯基
青梅市教育委員会教育部文化課長 / 青梅市立美術館館長 浜中茂
JT-ART-OFFICE 代表 勅使河原純
小澤酒造株式会社 企画室長 福岡睦月
宗建寺住職 棚橋正道



今年度の青梅アート・ジャムオープングレセプションが、初日の9月17日(土)青梅市立美術館第2展示室にて開催されました。NPO 文化交流機構「円座」の松島美知子事務局長の進行により、最初に青梅市長 浜中啓一氏のご挨拶、青梅市教育委員会教育長 岡田芳典氏、青梅市立美術館 館長 浜中茂氏、小澤酒造株式会社企画室長 福岡睦月氏のご挨拶と続き、美術評論家勅使河原純氏よりお言葉を頂戴いたしました。また青梅アート・ジャムにいつも多大なご協力を頂いている宗建寺住職 棚橋正道氏より梅のお話も伺い、最後に副実行委員長の江見高志が参加作家を紹介し、お礼の言葉を述べました。和やかな雰囲気とともに2016 青梅アート・ジャムの幕開けを飾りました。またレセプション終了後は会場をDining&Gallery 繭蔵に移して、オープングパーティーが開催されました。展覧会やイベントの話とともに美味しい料理とお酒などを皆で楽しんで、参加者同士の親交を深めました。



「梅に捧げる」展

9月17日(土)～11月13日(日)

9:00～17:00

今回私たちは、この地青梅の歴史と文化、そして何よりも美しい里山を古来より彩って来た「梅」に焦点を絞って、制作と企画を進めてまいりました。

また、前回より美術館展示は隔年のビエンナーレ形式となり、昨年のワークショップ

プ企画のみとは違って、期間もボリュームも大幅に拡大しています。青梅にとって特別の存在でありながら、昨今のウィルス発生による伐採と再生への

道のりを目の当たりにする中で、この「梅に捧げる」のテーマを多面的にとらえた作家一人一人の独創的な表現と御岳山頂での多彩な企画は、訪れる全ての方々に印象深く受け止めて頂けた事と思います。

これを足がかりに、今後も更にここ青梅の地に根ざした表現イベントを展開し続けたいと願っております。





< Steel's Ash > 鉄



< 宇女神 (梅) > (3点共) 棉材、金箔、岩絵の具



青野 正

毎日犬と近くの多摩川を散歩をしていると時折、小石や砂利の間から一握りの鉄片が顔を見せ出逢えることがある。

人に使われ、流され晒され、漂いついたその河原。その表情に思いを馳せてはしばし時を忘れてたりしている。

* * * * *



< 小梅 > 鉄

時の経過した鉄は、痛くてどこか面白い。

人類は、鉄を見出し歴史を紡いできた。

次第に、隅々まで鉄を使いながら生活、環境、世界観を変えてきた。

大量に使った。

線路として、橋として、戦車として弾丸として。

鉄は、地に生まれ、風に飛ばされいつしか土に戻っていく。

私は、いつもこの事に魅せられながら制作を続けている。

青野 正 (金属彫刻)

- 1980年 東京造形大学彫刻科卒業
- 1993年 フジサンケイ・ビエンナーレ現代国際彫刻展 特別賞
- 1994年 アートリゾート朝来 2001 野外彫刻展 in 多々良木 '94 大賞
- 1997年 第2回 荒川リバーアートコンテスト 特賞
- 1998年 ヤマの男たちのモニュメント 大賞
- 1999年 第10回川鉄デザインコンペ グランプリモニュメント賞
- 2010年 日本芸術センター第2回彫刻コンクール 金賞(同2011)



< Steel's Ash > 鉄



伊藤 光治郎

梅に捧ぐと題したものに、彫刻にとってどのように出来るかがまず悩みの種であり、漠然とした日々が過ぎてゆく。ふと神を彫ろうと思い立つ。それも女神像を今回梅の木伐採の件にての題であり司る神の表現も宜(むべ)成るかなとの想いもあり、幾たびかの試作のなかでだんだんと細長くなり始めた。木の生命のように上へ上へと、梅神から宇女神になり宙(そら)へ向かうのと地に降りる

2体作ることになる。色も宙へ向かうものは白く半裸で紅白梅を身に纏い、降りてくるものは宙の紺碧に命の種を宿し静かに舞い降りる。地に留まる宇女神は完成されたものだが目に見えぬ、見たくとも見えぬものとしてその形体は不確実なもの見る者の内に在るものとして想像することが肝要であり、晒木綿でくるまれて存在する。ひとつの題に成り立ち難しいものに四苦八苦しなが



< 梅無碍 > 棉、梅の木



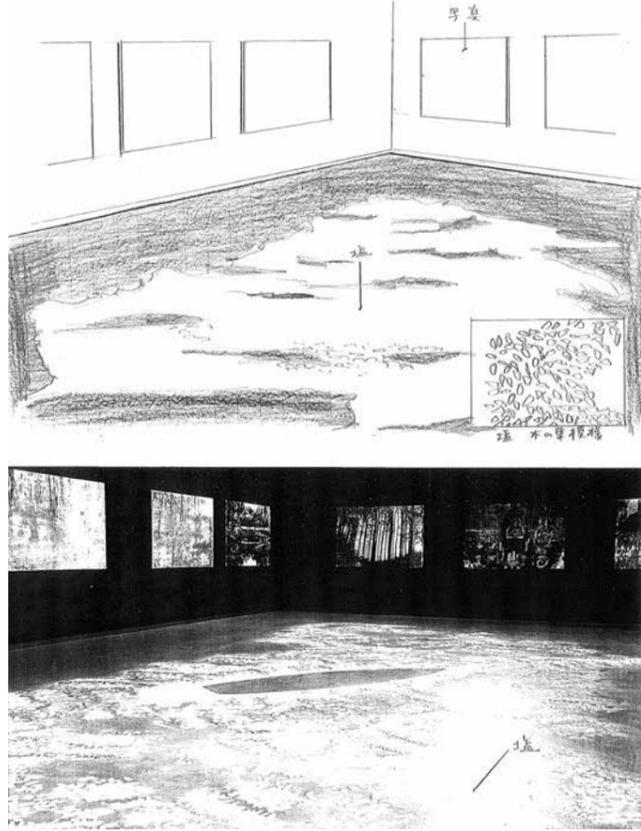
伊藤 光治郎 (木彫)

- 1945年 山形県生まれ
- 1988年 創型会出品
- 1995年 創型会文部大臣奨励賞受賞
- 2002年 創型会賞受賞
- 2008年 無所属
- カナダ大使館 高円宮記念館「太平洋にかかる橋」展 出品
- 2010年 カナダ ビクトリア アート・ジャム展参加。レディスミスにてネイティブカナディアンと展覧会
- 2013年 宮城県栗原市 風の沢ミュージアムにて半年間個展
- 陸前高田被災松にて「いのちを運ぶ」モニュメント制作
- 日本美術家連盟会員

井上 廣子

2011年3月11日、東日本大震災が勃発しました。津波が全ての物や事を押し流し、人々が営々と築いて来た日常の生活が一瞬の内に水没し、生命がまるで木の葉の様に流されて行ったのです。テレビで放映されたこの映像は、あの3月11日以来現在まで私の脳裏に蘇ります。ここ青梅の地でも、古来より人々が愛で慈しんできた梅の木々の大半が数年前に伐採されました。私は日本とドイツを往き来しながら作品制作をしています。作

品<Mori, 森, Wald>では日本とドイツの森(白黒写真を布にプリントした作品)を通じて自然の驚異や圧倒的な力、自然の光と影を表現したい。また森は生命を育み、やがてその生命を自然に還す。森を通して生と死の循環を表現し、私達はどうの様に自然と共存し、次代にどの様な種子を残すことが可能なのだろうか。森の記憶を通じて未来へのメッセージを発信したいと考えています。

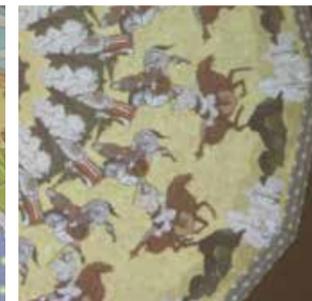
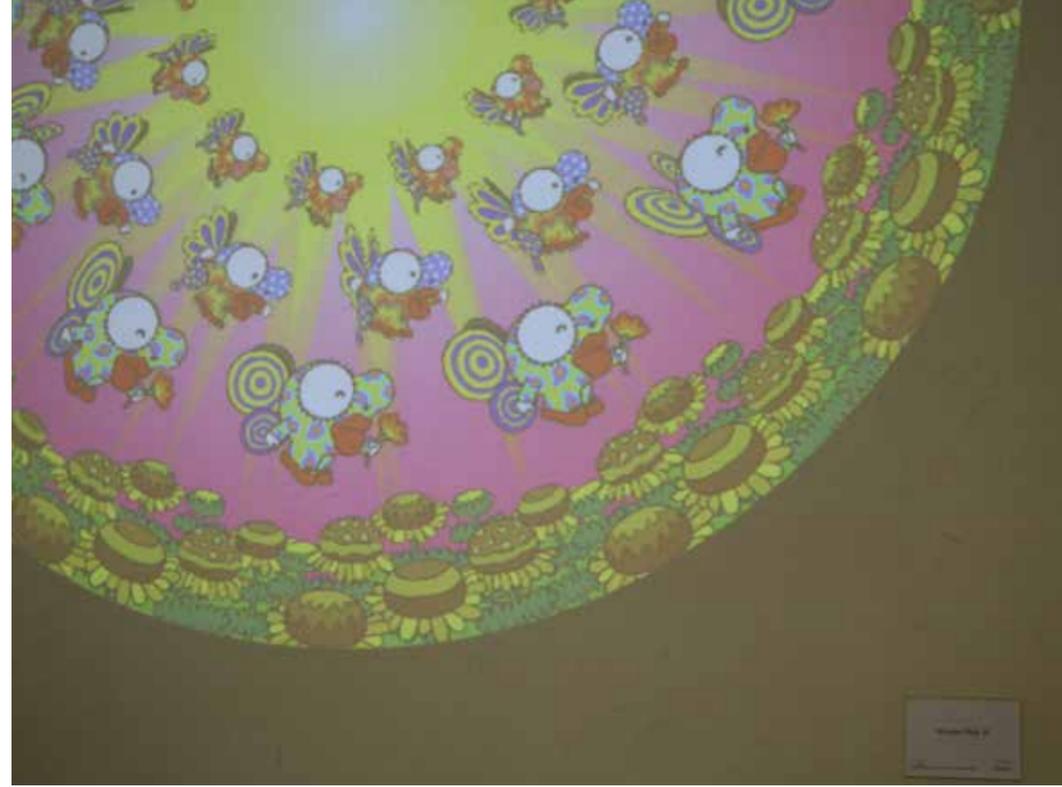


井上 廣子 (造形作家)

大阪生まれ、奈良在住、ベルリン、デュッセルドルフ、ドルムント、ウィーンで活動中
 1995年 井上廣子展 蘇生II (大阪)
 1999年 魂の記憶 - A memory of soul (東京)
 Absence (デュッセルドルフ、ドイツ)
 2001年 記憶・境界・不在 (大阪)
 2003年 汝何を欲するか (東京、名古屋)
 2011年 Mori (ドルムントクンストフェアライン/ドルムント、ドイツ)
 Indide-Out (アルトテックMUSA美術館/ウィーン 同2005ウィーン、同2008東京)



< Mori, 森, Wald > シルバーゼラチンプリント、絹



< Wonder Disk IV > デジタルアート

うるまでるび

円盤状の絵が壁に投影されています。観客はその手前にあるレバーを回します。すると壁の円盤が回り出します。レバーを回し続けると、突然その絵が奥行きのあるアニメーションになってしまいます。静止している絵が、観客のアクションによってアニメーションになる。作家と

ユーザーが一緒になって完成させる体験型のアート作品です。当作品は1998年に初版を渋谷パルコで発表し、その後サンフランシスコの美術館などでの展示を経て、本作が第4版になります。進化し続けることができるのもデジタルアートの特徴です。

うるまでるび (アニメーター)

おしりかじり虫の作者として知られる2人組アーティストユニット。近年は絵本「白オバケ黒オバケのみつけて絵本」が10万部超えの大ヒット中で、台湾、韓国で出版されたほか、そのキャラクターがオランダでスクールバスのアイコンに採用されるなど、世界に広がりを見せている。映像制作、楽曲制作、アプリ制作などの多彩な活動も、たったひとつの目標である「作品によって世界の子どもとそのファミリーを笑顔にする」のためである。



海老原 露巖

今回のテーマは「梅に捧げる」という事。どんな書を展示するべきかを考え、この「道」という字に行きました。この書自体はこの展示会のために作成されたものではなく、別イベントの公開制作にて書かれたものです。青梅という土地で、昔から青梅という土地で、昔から愛されてきた梅の木の一部をウイルスで失い、当たり前にあった自然の恵みを失った悲しみの記憶から始まる、再生のための努力に思いを馳せたとき、その歩みは一つの道として心に浮かび上がってきます。

自己を顧みるとき、努力の裏みや喪失の悲しみ、達成の喜びなどの出来事は、一つの道として形を残している事に気が付きます。どんな人でも、それぞれの経験で描かれている道を持っているはずで。青梅の梅の喪失という出来事は、それぞれの人々の経験にどんな道筋を描く事になるのか、願わくばより良い道を辿ることが出来るよう祈っています。



<道> 布、墨 中国清朝 乾隆帝御墨



海老原 露巖(書)

栃木県生まれ。書道家、墨アーティスト、文化庁文化交流使。作品は海外の日本大使館や中国・カナダの博物館などに収蔵される。国際的な評価も高く、世界各地で個展展覧会を開催する。映画、舞台作品、TV番組、書籍の題字制作などを多数手がける他、国内外各地で書道揮毫パフォーマンスを開催。2012年に文化庁文化交流使として任命され、イタリア、イギリス、フランス、中国の各大学で講義やワークショップを行う。現在「書巖の會」を主宰し後進の指導を行っている。

エバレット・ブラウン

日本の四季がはっきりしているとよく言われているが、僕はそうだと思わない。どちらかというと日本の四季の魅力は季節が重なっているところ。実を言うと日本は四季だけではなく、梅雨の季節もある。さらに自然をよく観察すると、5日おきぐらいに微妙な季節の変化が楽しめる。

それにしても日本の自然の中の季節の重なりは面白い。まだまだ寒い日が続く一月の末、周りの空気に豊かな花の香りが漂う。庭にある梅の老木を観ると「ああ、春を迎えているな」という思いが心に浮かぶ。最近気がついたけど、桜の花より梅の花の方にだんだん馴染むようになっていく。やっぱり、

歳をとると自然に春に憧れる。梅の魅力は花だけではなく、果実にもある。梅には毎年梅雨の時期に美味しい梅が実り、自然の恵みが楽しめる。塩につけると梅干しとしてもいただける。今回の展示会のテーマは「梅」。作品は一年を通しての梅の姿を表現した5点。作品の表現方法は湿板光画という古典的な写真の技法だ。それを踏まえて、自分独自の技を生かして和紙に焼き付けた作品を作る。日本独特な陰影の世界をこの技法で上手く表現しているつもりだ。

<梅 1> (左上) 湿板光画 (和紙)
<梅 2> (左下) "
<梅 3> (中央) "
<梅 4> (右上) "
<梅 5> (右下) "



エバレット・ブラウン(湿板光画家)

2010年 「日本力」松岡正剛との対談集 (ノベルコ出版)
2011年 「TOHOKU」ダボス会議 (世界経済フォーラム)
2012年 「母なる国へ」アムステルダム美術館 (イリア)
2013年 文化庁長官表彰被表彰者
2014年 「巻分/巻展」山下画廊 (銀座)
2015年 「Omokage」フィンランド国立美術館 (フィンランド)
2016年 「日本の面影」竹中大工道具館 (神戸)
「Contemporary Talents of Japan」Ronin 画廊 (NY)





< 廃屋の切られた梅を見つめる禁猟区と水源林の立ち標識 > ブロンズ、石膏、木

< GUIDEPOST > ブロンズ



< 梅銀河 > 御影石、網



江見 高志

廃屋の切られた梅を見つめる禁猟区と水源林の立ち標識

草木に飲み込まれそうな廃屋。脇には古梅の丸太が積みまれている。腐敗菌と酸化により、やがて崩れ落ち、苔むし、土に戻っていく。林道の向かいに立ち標識。「禁猟区」、「水源林」。赤錆にまみれながら廃屋になっていく家と住人の歴史を見てきた。住人は去ってたまにしか来なくなり、枝の伸び放題だった古梅は伐採され丸太になった。溪流の水音、あたりを包む湿った空気、幾多の菌類と

茂る草木の中、かろうじて立っている標識。文字。文字は社会だ。ここに永遠の自然と社会の端っこが密かに佇む。ここを静かにうかがう双眸は里から林道を登り来った彫刻する者。自然も人工物も社会もすべては移ろう。私はこれらの関係性と移ろいを、能舞台の上で表現してみたかった。移ろいというならば軸なるものを探したいと思っている。



< 枝の舞 > ブロンズ
< 剪定された梅の木 > ブロンズ
< 板塀と梅の枝 > ブロンズ



江見 高志 (金属彫刻)
1951年 岡山県に生まれる
1985年 東京藝術大学大学院彫刻科修了
1989年 ブロンズ作品によるインスタレーション
個展 Key Gallery、KANEKO Art TOKYO 他多数
グループ展 青梅アート・ジャム 他多数

奥野 誠

作品「梅銀河」は、梅の花が一輪一輪が星、梅の木が一つの系、吉野梅郷に咲いた梅の花の全景を銀河宇宙として捉えた作品です。一つの石とその周囲にネットを波状にうねらせ、ネットは起伏のある山々に咲いた梅の花、中央の石は一輪の梅の花であり銀河の中心です。石は水平方向に二つに割り、中を割り抜いて空洞になっています。もう一つ武蔵御嶽神社に展示した石の作品は、梅の硬い種の中にある仁を現した作品です。この二つの作品「梅銀河」の空洞(ブラックホール?)と梅の種仁は、

見えないトンネルで繋がっていて、梅の核となる種が抜け出て神社で清められ、再び梅銀河へ戻ってくるというイメージです。清められた梅の種が新たな健康な木々となり、再び梅の景が見られますよう。青梅の梅の木は、PPVというウイルスの感染が確認され、植物防疫法に基づき、これまで三万本を超える梅の木が伐採されました。PPVの根絶と青梅吉野梅郷の復興を願い制作した作品です。(※ PPV= プラム・ポックスウイルス)

奥野 誠 (彫刻)

- 1991年 第6回神戸具象彫刻大賞展
- 1993年 いわて石彫展 第3回横浜彫刻展
- 1994年 第4回足立野外彫刻展
- 1997年 メキシコ国際彫刻シンポジウム
- 2004年 那須野が原国際彫刻シンポジウム
- 2014年 井川町彫刻シンポジウム
- 現在 日本美術家連盟会員 二紀会委員

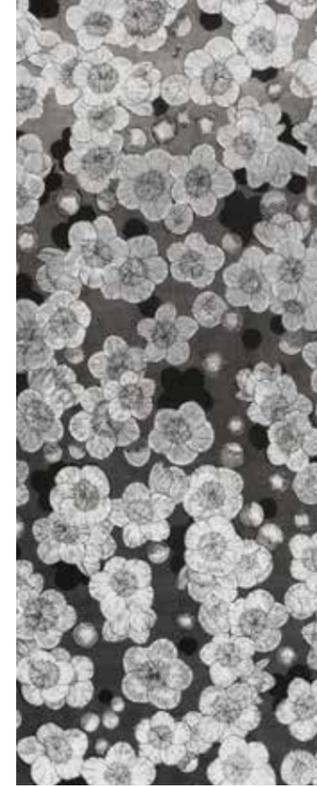
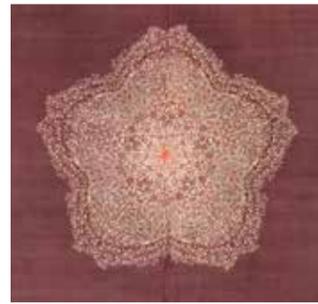
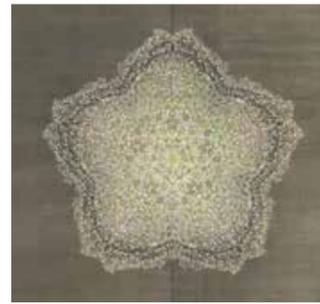


< 仁 > 黒御影石





< 昆虫たちの庭仕事 > 麻布、型絵染



< 梅 (plum) > 和紙、墨、アクリル板

塩野 圭子

「梅に捧げる」というテーマに沿って制作する事が、何となく不自由な印象を持っていた私ですが、実際に「梅」という植物についてやそれにまつわる歴史や文化を知れば知る程、興味深まりさらに世界が広がって行くのを感じていました。

また、長年青梅に暮らし毎年早春の里山に溢れるほどの美しい彩りと優しい香りを満たしてくれる梅の木々そのものへの感謝の思いも染め込むことが出来たでしょうか。

さらに型染めのパターンで、今まで取り組んだ事の無かった五角形をデザインするのがとても新鮮で、庭先の梅の木や小さい動植物の姿を描いていく中での楽しい発見の多い制作となりました。



< いつもそこにある 白梅 > 麻布、型絵染
 < いつもそこにある 紅梅 > "
 < めじろの春 > "
 < 庭の松竹梅と小雀 > "



塩野 圭子 (型絵染)

- 1954年 東京都生まれ
- 1977年 多摩美術大学染織科卒業
多摩美術大学染織研究室 副手 ※'81年まで
- 1995年 吉村昌也・塩野圭子二人展(奥多摩)
- 1997年 「多摩平和いのち展」ポツリホール(青梅) ※以降 06年まで毎年
- 2000年 個展「塩野圭子型絵染展」ギャラリー蕭蔵(青梅) ※以後毎年
- 2004年 「小松茂夫・塩野圭子 二人展」ギャラリーいそがや(港区)
- 2005年 二人展「木のうつわと型絵染め展」ギャラリーさなぎや(福生)
ワダ・ネイランド 青梅「野草と遊ぶ」パゲータ、都立農林高校にて。以後小学校等での環境学習ワークショップ多数
- 2014年 個展「塩野圭子型絵染展」羽村市生涯学習センターゆとろぎ

< 赤い実の万華鏡 > 麻布、型絵染



杉本 洋

今回は「梅」がテーマという事で、自分の記憶にある梅の姿を描き出し、空間に配置して満開の梅の花のイメージを構成いたしました。また、個人のギャラリートークには 50名近い方々に越え頂き、墨について、紙について、日本画について、その歴史や技法等につまわるエピソードを交えてお話をしたところ予想外の沢山の質疑応答があり、日本の文化から果ては宇宙にまで話が広がり予定を越えて、時間を忘れる意義深い交流ができました。

杉本 洋(日本画)

- 1951年 東京都生まれ
- 1977年 東京藝術大学大学院日本画科修了
- 1989年 出雲大社大阪分祠神殿襖絵制作(堺市)
- 1994年 地藏院本堂天井画制作(あきる野市)
- 1995年 清岩院本堂襖絵制作(福生市)
- 1999年 京濱伏見稲荷神社参集殿壁画制作(川崎市)
唐招提寺(奈良)「梵網会」團扇絵制作、以後毎年
- 2004年 文化庁文化交流使に指名される
- 2008年 東大寺二月堂修二会行法用紙手制作 以後毎年
カナダ大使館 高円宮記念館 「太平洋にかかる橋」展 出品
- 2010年 MISSA (Metchosin International summer school of the Arts) に参加
- 2011年 奈良・町屋の芸術祭「HANARAT はならあと」にて個展 杉本洋作品展 「大和路・五條から」
- 現在 文化庁文化交流使、横浜美術大学講師、NPO文化交流機構「円座」理事長
- 個展 カナダ・ヴィクトリア美術館 ほか多数
- 作品收藏 秋篠宮家、国立司法研修所、長徳寺、光徳寺、宝蔵院、郷さくら美術館 他





< 梅の種 > 陶



< 梅瓶 > 陶



< 花姫 > 黒御影石



鈴木 寿一

今回の青梅アートジャムの
 展示会は「梅に捧げる」と
 いう明快なテーマが設けら
 れていて、それに作家がど
 う答えるかが制作のポイント
 だと考えました。日頃は日
 常使える器や花器などを制
 作している自分にとって、美
 術館で展示するような作品
 というのは普段はあまり意
 識の中には無いので、とて
 も特別な感じがしてかなか
 取り掛かることができませ
 んでした。あまりよそ行き
 にならず、そして何よりも大
 切にしたかったのはどんな
 メッセージを作品に込める
 かということでした。「梅干
 し」は日本人のソウルフード、
 元気の源です。ましてや梅
 の実の産地の青梅市民に
 とっては馴染みの深い食べ
 物です。そんな梅干しを山
 盛りのご飯にのせて大勢で
 食べる。食べれば元気にな

る。元気を出してみんなで
 力を合わせて頑張りましょ
 う。そんな思いを込めて、
 梅干しとご飯ののったご飯
 茶碗を制作しました。一応
 器作家なので、梅干しとご
 飯は蓋になっていて、蓋物
 の茶碗として使えるよう工
 夫しました。



鈴木 寿一 (陶芸)

1963年 秋田県生まれ
 1990年 東京藝術大学大学院工芸科陶芸専攻修了
 1996年 青梅市日向和田に築窯 独立
 現在 明星大学、女子美術大学、横浜美術大学非常勤講師、日の出陶房講師
 展覧 日本橋三越、青山桃林堂、Potter's pot、梅が丘アートセンター、
 工芸えんどう、青梅クラフト館 他
 作品収蔵 中国宜興陶器博物館



< 梅瓶 > 陶

田中 毅

制作をしている時は、普段
 何となく持つ、もやもやと
 した不満・不安に形を持た
 せたいと感じています。
 私は制作を始める時にとて
 もざっくりとしたプランしか
 作りません。
 画面上で泥遊びのように絵
 の具で遊んでいるうちに何
 か見えてくるだろうという程
 度のもので。

そこから自分の予期しない
 かたちが生まれてきます。
 作品には動物や植物や風
 景などが出てきます。
 なぜその形が現れて来た
 のかを考えて、整理するこ
 ろまでが1セットの作品
 制作のプロセスになってい
 ます。
 なので、すごく無意識とか、
 偶然性に頼っているのでコ
 ンセプトという大それた
 ことのように感じますが、
 言葉にするなら予期しない
 ものとの出会いや変化が私
 が制作することのポイント
 だと思います。



< 梅の花 > 名栗石



< 梅の花咲くや姫 > 黒御影石



< 阿 > < 吽 > 黒御影石



< 安 > < 心 > 黒御影石

田中 毅 (石彫)

1951年 宮崎県青島生まれ
 1977年 東京藝術大学大学院
 美術研究科彫刻専攻修了
 1985年 神戸具象彫刻大賞展 大賞受賞
 1994年 現代日本具象彫刻展 大賞受賞
 2000年 むし虫ワールド(群馬県立美術館)
 2002年 日向現代彫刻展 市民大賞受賞
 2007年 桜の森彫刻コンクール 町民賞受賞
 2015年 UBEビエンナーレ 入選
 その他 個展グループ展多数



<サイセイキ(再生樹) 吉野梅郷 2016> (4点1組) 本小松石



<とある樹の写し> 木、ブロンズ、樹脂



山口 幹也

一年でどれほど梅を食すのか?自らの血肉の一部になってくれた梅の種に、マイナンバーをはじめとした様々な自分にまつわる数字の一部を、異国の数字を用いて書きだしてみた。

No.の答え合わせ。上から順に 1096157104256434135 19501708520539320644169 16113449043114056009091 03893185234832013094262 78020700052181721941212 61218545913843827797416 01031014059038641197313 でした。



<No.> 木、漆、種

平井 一嘉

青梅アート・ジャムに初めて参加させて頂きました。展示場所は3ヶ所。御岳山の参道と展望台では石臼でお茶や珈琲に挽いて貰いました。美術館ではメインの梅に捧げるテーマで何をしようかとを思いを巡らし、ウイルスによる約36,000本の梅の木を伐採されたことを聞いて梅郷の公園を4月に視て来た。そこには切り株しかなくその上切り面には梅の木だけ格子状の溝がチェーンソーで付けられていた。また伐採する前の満開の時のスナップ写真を元に対面の斜面に十数メートルの大きさに小

さなパネルを集積して拡大した絵を地元の有志の方たちが以前の様に再現を願う展示がしてあった。植栽が可能になり時が立てば伐られた梅の木の話は忘れ去られてしまう思いと自分が抱えている石で30年以上前に買った本小松石は秩父の親戚の土地に置いて貰ったもので今使わなければ忘れてそのままになってしまうからと昨年川越のアトリエに持って来たその原石に思いを彫り込むことにしました。また、11月にウイルスの確認がないとして植樹が許可されたと報道されています。



<梅花> 赤御影石、白大理石

<サイセイキ> 4点 赤御影石、白大理石 お茶用



<コスモス> 白大理石、本小松石



<サイセイキ(再生樹)> 白大理石、本小松石



<天神様> 白檀、梅の実



平井一嘉(彫刻)

- 1983年 多摩美術大学大学院修了
- 1982年 「第二回高村光太郎大賞展」 美ヶ原高原美術館賞受賞(同`84)
- 1983年 「神戸具象彫刻大賞展`83」 優秀賞受賞(同`85)
- 1987年 イタリア政府給費留学生として渡伊(`89帰国)
- 2015年 デュルビュイ市 石彫シンポジウム参加(羽生市と姉妹都市)ベルギー-王国
- その他 グループ展多数

山口 幹也(木彫)

- 1973年 東京都生まれ
- 1999年 金沢美術工芸大学 大学院修了、同年 伊藤光治郎氏に弟子入り仏像彫刻を学ぶ。
- 2007年 深川不動堂にてグループ展に参加(同2008年)
- 2009年 第13回 日仏現代美術展で新作家賞を受賞
- 2010年 個展(吉野芸の里 企画展) 石川県白山市
- 2011年 個展(ギャラリー悠玄/銀座 同2014)
- 2013年 個展(バレットギャラリー/麻布十番)
- 2014年 第18回日仏現代国際美術展で会員優賞受賞



「梅をテーマに茶碗を作ろう」

10月1日(土) 14:00 ~ 16:30

2016年10月1日(土) 青梅市立美術館 市民ギャラリーにおいて1回目のワークショップが行われました。今回は「梅をテーマに茶碗を作ろう」ということで15名のご参加を頂き賑やかに進行することができました。用意した茶碗の石膏型に各自が色粘土で思い思いの梅を表現して個性豊かな茶碗が完成しました。完成した作品は11月3日(木) ~ 13日(日)に同ギャラリーにおいて展示され最終日に受け渡しとなりました。



「梅をテーマに白いお皿に絵付けしよう」

10月15日(土) 14:00 ~ 16:30

2016年10月15日(土) 青梅市立美術館 市民ギャラリーにおいて2回目のワークショップが行われました。今回は「梅をテーマに白いお皿に絵付けしよう」ということで9名のご参加を頂き楽しく進行することができました。用意した素焼きのお皿に各自が絵の具で思い思いの梅を描いて華やかなお皿が完成しました。完成した作品は11月3日(木) ~ 13日(日)に同ギャラリーに置いて展示され最終日に受け渡しとなりました。





展示処 青ジャム 石臼ワークショップ 保存食パーティー

9月18日(日)～10月23日(日) 主に土日祝のみ
10:00～15:30

大展望台休憩所2階にて『展示処青ジャム』は9月18日～10月23日、土日祝開場の会期中で開催致しました。日本画、水彩画、木版画、木彫の作品約40点のを展示、販売致しました。会期中は、ワークショップ「石臼作品でお茶を挽こう!」を随時開催し、石彫作家・平井一嘉氏の石臼作品でお茶っ葉とコーヒー豆を挽いてもらい、陶芸家・鈴木寿一氏の器で味わってもらう体験型のイベントを行いました。また「保存食パーティー」では、レシピパーティーも兼ねて、旅作家・阿部静プロデュースの梅干しをはじめとした、様々な地域の保存食を集め振

舞いました。また会場にて、木彫作家・山口幹也による「木彫制作パフォーマンス」も行いました。展望台での展示ということもあり、登山のお客様が多く、休憩をしながらゆっくりと作品を覗いていただきました。石臼ワークショップがとても好評で、みなさん楽しみながら石臼を引いていただきました。悪天候のため10日間の開催になってしまいましたが、222名という多くの方にご来場頂きました。御岳登山鉄道の皆様にご尽力を賜り、感謝致します。



<石臼ワークショップ>



<保存食パーティー>

御岳山 野外彫刻展

9月17日(土)～11月13日(日)

御岳神社に参る途中、御岳山荘には妖怪の子ども達かな? 怖い顔をしているがユーモラスな子たちが遊んでいた。穴に隠れている子も。みやげ物屋の手前には遺跡(夜には明かりが灯る)、参道には狛犬が2対(少し変わっている)、山の魂のような黒い塊、最後は御茶でも出してくれそうな石積みを表示、そして本殿へと参ります。





阿部 静

今回、御岳山の展望台にて展示することとなり、普段山をフィールドに活動しているわたしは、「山で展示するのだから、山を主題にした作品を作りたい!」という思いが強くなり、梅のテーマそっちのけで山についての作品を作る頭にシフトしていた。

御岳山エリアの山を題材にしようと思い、6月に奥多摩の山に入り、2日間かけて歩いた。この地域の山は身近すぎて大概日帰り下山してしまうのだが、一日中がつつり歩き、暗くなる頃にテントを張り、くたく

たになった体を横たわらせて泥のように眠ってしまう。そうして次の朝、陽の昇らぬうちに起き出して、誰もいない朝の森をゆっくりと進む。フクロウの聲が森中に静かに響き渡る。

御岳山展望台でも何度か現れた、あたりを包み隠すようなもや。しっとりとした朝露の森を幻想的に見せていた。

なんととっても美しく、朝陽を浴びるように輝く、露の群生。立派に育った落が生い茂る大地。これが、梅雨の奥多摩の山のうつくしさなのかもしれない、と思った。

それらの感動を素直に絵に描いて発表することに至った。



池田 菜摘

今回は山の上での展示なので、花や木の実、野菜や果物等のモチーフにした作品を多く展示しました。

また、山の四季の移り変わりを展覧会場でも味わって頂けたらと思います。春、夏、秋、冬の植物をバランスよく展示することも心がけました。

梅の作品は、梅の花や実を描いた作品の他に、梅の木の妖精の子どもが、地上に住んでいる小人の子ども達を木の上に呼んで、花を見せてあげたり、木の上で一緒に遊んだりしている様子を描きました。伐採により

大量になくなってしまいましたが、まだ木が元気だった頃や他の場所で生きている木で、こんな世界が繰り広げられていたらいいと思いますながら制作しました。自分自身の作品だけでなく、季節によって様々な顔を見せて、身近にある梅の様々な表現を見ることができて、とても印象深い展示でした。

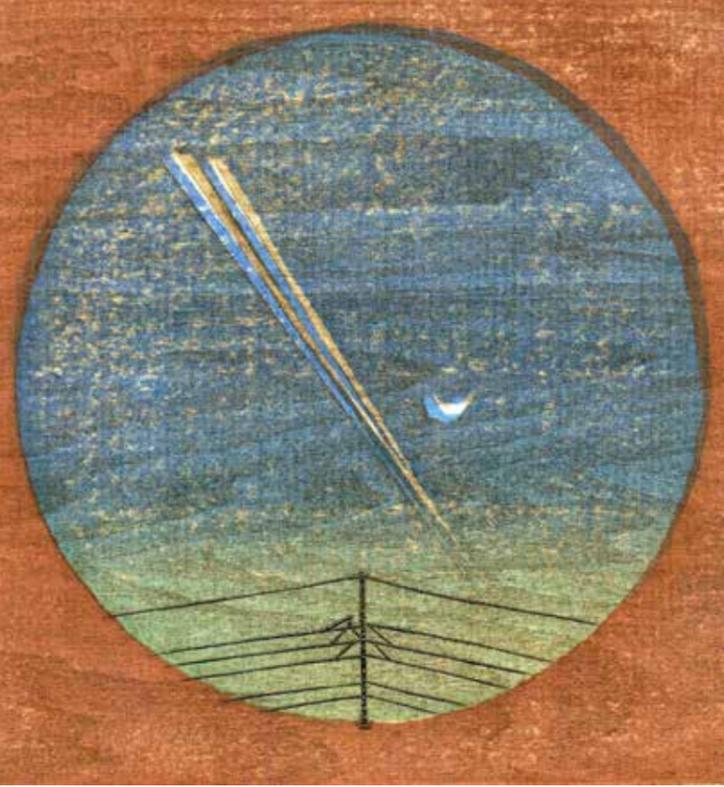
池田 菜摘 (絵画)

- 1987年 神奈川県生まれ
- 2005年 横浜美術短期大学入学
- 2007年 横浜北部美術公募展 2007 第43回 鎌倉美術展
- 2008年 第17回 全日本アートサロン絵画大賞展
横浜北部美術公募展 2008 第44回 主体展
- 2009年 横浜美術短期大学卒業
池田菜摘・宇津木綾子・田島愛及3人展「ノスタルジア」
OME ART JAM + 展示
第61回 中美展
第33回 風子会展
- 2010年 第89回 朱葉会展
- 2011年 ギャラリー La Mer 公募展
「七人展 FLASH!」・「真夏のサムホール展」(2012)
東日本大震災義援展 (以後毎年)
第24回 日本の自然を描く展
2011 ソーヤーカフェ夏企画
「西荻!百鬼夜行展」
- 2012年 個展「SEASONS」(銀座フォレストミニ)
青梅アート・ジャム 展示
ギャラリー La Mer 公募展
「真夏のサムホール展」
アモーレ銀座企画展
「天使・墮天使」・「幻想・狂乱」
- 2013年 Gallery Conceal 企画展
「ココロコロ」企画立案、展示
主体美術協会 神奈川作家展
第9回 ベラドンナ・アート展
- その他、第38回~第41回 現代童画展 入選
グループ展多数

阿部 静(旅作家)

- 2008年 横浜美術短期大学卒業
- 2011年 横浜トリエンナーレ関連企画・BankART Life3
- 2012年 ハンマーヘッドスタジオ(横浜)にてレジデンス制作・作品発表多数(~'14)
ART JAM IN CANADA Community Arts Council of Greater Victoria / カナダ
- 2013年 横浜美術大学非常勤助手(~'15)
- 2015年 第1回 TANPEN AWARD 大賞受賞
- 現在、旅を主軸とした文章・ドローイング・インスタレーションなどの表現活動を行う

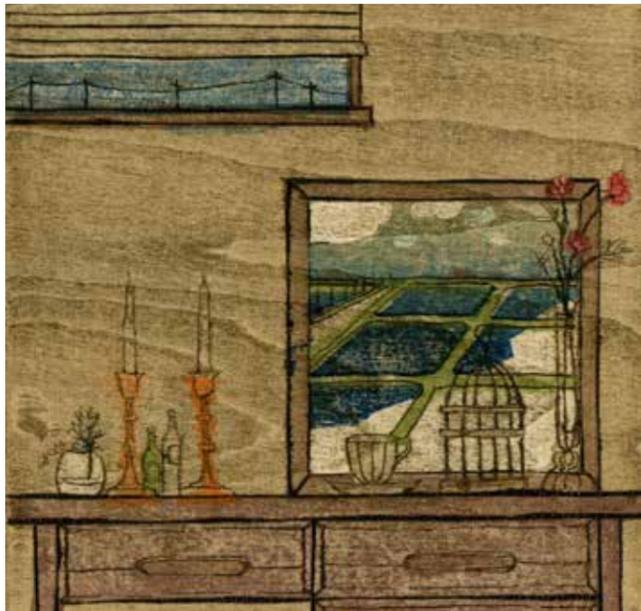




鈴木 ひろみ

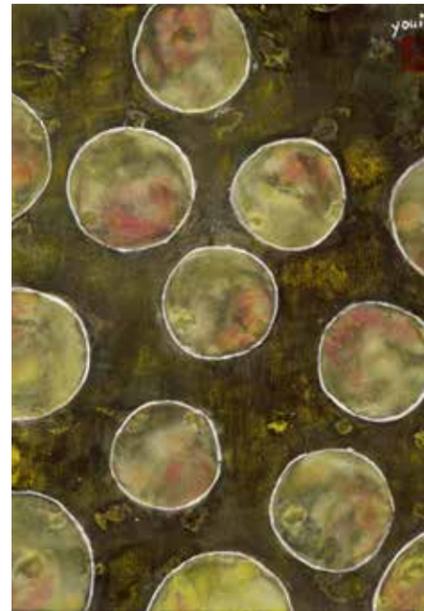
風景を作品にしています。いつもの風景も木版画として作品に表現する事で、新しい風景と出会えます。木版画凹凸版刷りと呼ばれる技法で、凸版で摺った色彩の上に凹版でシナベニヤの木目を刷ります。木目は空気の流れや雲の形のように見えます。木の温もりをそのまま作品に閉じ込めたいと思い、この技法に辿り着きました。山上での展示は初めてで、搬入搬出は作品の移動や悪天候など、山上ならではの苦労もありました。

ですが「展示処青ジャム」とタイトルの通り、お食事処のように作品を観ながらくつろげる空間になったと思います。登山のお客さんとお話しは、楽しく、発見も多かったです。展望台からの風景は毎回違う表情をしていて、見るたびに変わり、驚かされました。山のパワーを頂いた気がします。人は山から沢山の物を頂いていると、再確認しました。



鈴木ひろみ（版画）

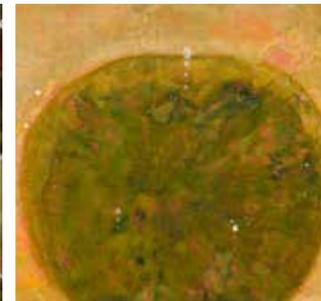
- 1987年 埼玉県久喜市生まれ
- 2010年 横浜美術短期大学（現・横浜美術大学）専攻科絵画クラス修了
- 2012年 個展「そこにある風景」伊勢丹浦和店
個展「どこにもない部屋」ギャラリー上原（代々木上原）
「秋の版画 collection」art Truth（横浜）
オータムアートフェスタ！ by Gallery UEHARA ヒルトピアアートスクエア（新宿）
- 2013年 個展「あの雲はどこにもない」伊勢丹浦和店
個展「音のない部屋で」ギャラリー上原
奈良・町屋の芸術祭 HANARART 五条新町エリア（奈良・五條市）
個展「風景の向こう側」art Truth（横浜）
- 2014年 個展「見えない月を眺めるように。」伊勢丹浦和店
新進芸術家育成交流作品展
「FINE ART/ UNIVERSITY SELECTION 2013-2014」筑波大学芸術系
二人展～ノスタルジア～ 伊勢丹松戸店
アールデビュタントURAWAの足跡ーそれからー 伊勢丹浦和店
個展「遠ざかる空」ギャラリー・アッカ（入谷）
- 2015年 個展「隙間から青色」art Truth（横浜）
二人展～ノスタルジア～ 伊勢丹松戸店
- 2016年 グループ展「woodcut collection 4-木よりいつるものたち-」art Truth（横浜）
個展「片隅にある風景」ギャラリー・アッカ（入谷）



長倉 陽一

昨年、体調を崩して入院したため、健康体ではあったのですが大事を診て展望台の展示に集中させていただきました。御岳山の上で展示は初めてだったのでどのようなものを準備すればいいのか見当がつかなかったのですが、素直に山から連想したものを描きました。一緒に参加したメンバーとはどのような展示にするか意見を出し合い、自分たちからしっかり話し合ったのは久しぶりだったので楽し

く準備させていただきました。阿部さんが提案し準備してくれたお茶や保存食品を提供するワークショップもあり作品以外でお客様とコンタクトをとることもできてだったのでどのようなものを準備すればいいのか見当がつかなかったのですが、素直に山から連想したものを描きました。一緒に参加したメンバーとはどのような展示にするか意見を出し合い、自分たちからしっかり話し合ったのは久しぶりだったので楽し



長倉陽一（日本画）

- 1985年 東京都生まれ
- 2006年 第一歩展（日本橋 ギャラリー TT 日本橋）
北部横浜美術公募展 優秀賞（横浜）
- 2007年 グループ展 第1回 百華展（以後、2009年までに5回開催）
光の家ボランティア（現 社会福祉法人 埼玉医療福祉会 光の家療育センター）
- 2008年 横浜美術短期大学専攻科 造形美術 絵画クラス卒業
横浜美術短期大学 専攻科有志～卒業制作小品展～（横浜）
グループ展「room in the room」（青梅 / Dining & Gallery 藤蔵）
- 2011年 横浜美術大学・短期大学「飛翔する作家たち展」（たまプラーザ東急百貨店）
民話「送り狼と迎え狼」ワークショップ（ゆずの里勝仙閣）
朗読会（武蔵御嶽神社、軍畑、煉瓦堂朱とんぼ）
東日本大震災義援展（以後、毎年出展）
- 2012年 パフォーマンス「おいぬさまの行列」（青梅駅～青梅市立美術館）、（軍畑、煉瓦堂朱とんぼ）
- 2013年 パフォーマンス「送り狼と迎え狼」（吉川英治記念館）
brilliant wing14展（新宿）
- 2014年 フラット展（代官山）
rain days and...（銀座）
Artjam from Japan（Canada）
そのほか個展多数





山頂カルチャースクール 「御岳山を描こう」

日時：9月24日(土)～25日(日)
講師：杉本 洋(日本画)
宿泊：西須崎坊 蔵屋

9月にしては肌寒い雨の中をご参加いただいた方々にまずは御礼申し上げます。
御嶽山山頂周辺からロックガーデンまで傘を差しながら霧に包まれた幽玄な社殿、滝、溪流の写生。その霧が晴れると全く違う空間が広がり、自然の多様な顔に驚きながらの二日間でした。また、夜の懇親会は神社の話や絵の話で盛り上がり遅くまで楽しい時間をともに過ごすことが出来感謝しています。



山頂カルチャースクール 「能を学ぼう」

日時：9月24日(土)～25日(日)
講師：中所 宜夫(観世流能楽師シテ方)
会場：駒鳥山荘

アートジャムが始まってまもなくの週末、御岳山の駒鳥山荘で20代から70代の8人が集い、能楽WSが開催されました。私の考えている古代から現在に至る能の歴史を紐解きながら、舞の実際を体験し、最後は能面をかけて歩いてみるまで、一泊二日のプログラムを楽しみました。夜は観阿弥と世阿弥についてのお話を聞

いてもらい、その後のディスカッションでも能の神秘に迫る話となりました。体験教室や普通のお稽古、また講演会などを混ぜあわせた面白い催しになったのではないのでしょうか。

中所 宜夫(能楽)

- 1958年 愛知県生まれ。一橋大学在学中に観世九郎会当主・観世喜之師の内弟子になる。
- 1989年 初シテ。緑泉会例会「敦盛」
- 1997年 「道成寺」観世九郎会春季別会(於 国立能楽堂)
- 2005年 「安宅」緑泉会別会(於 観世能楽堂)
- 2006年 自作の新作能「光の素足」初演 第3回中所宜夫能の会(於 秋川キララホール)
- 2013年 『翁』名古屋九郎会(於 名古屋能楽堂)
- 2014年 『砦』名古屋九郎会(於 名古屋能楽堂)



第6回東日本大震災義援展

9月17日(土)～25日(日) 9:00～17:00

来場者数：243名 売上点数：158点

参加作家：35名+3団体(武蔵御嶽神社、社会福祉法人 埼玉医療福祉会 光の家療育センター、文化交流機構「円座」)

義援金額：30万6950円

送金先：福島県南相馬市災害対策本部 相馬市みらい夢義援金
第1回～6回の合計金額 269万8810円

前回までの義援展での売り上げは、石巻市へと届けられておりましたが、第6回目となる今回の義援展からは、青梅市と防災協定を結んでいる南相馬市へと届けることとなりました。8日間の会期中、35名の参加者と3団体の協力のもと、306,950円の義援金を集め送ることが出来ました。前回より2割以上義援金が少なくなってしまったものの、祝休日にも恵まれ各作家が、わずかながらでも被災地の復興の役に立ちたいとの思いが集まった展示となりました。



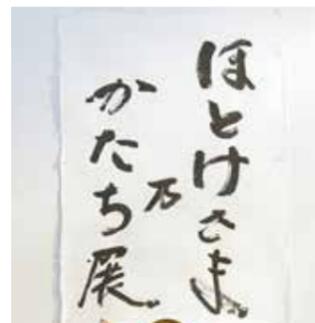
社会福祉法人 埼玉医療福祉会 光の家療育センター 作品展 「感じるままに」展

9月28日(水)～10月7日(金) 9:00～17:00



青梅市立美術館で光の家療育センターに入所している利用者の展示は2回目となります。前回展示した時よりも多くの作品を展示させていただき展示に参加した利用者も増えました。それぞれの作品が個性を出し合い、可愛くもあり深みもあり、力強い空間になったのではないかと思います。来場してくださったお客様の中には何度も作品を見に来てくださる方もいて、作品を見て驚き、癒され、感動されるなどいろいろな方から声をいただきました。会場に置いてあったノートにはたくさんのメッセージや感想を書いていただき、展示が終わってから施設で暮らしている利用者と一緒に嬉しい気持ちになりながら読ませていただきました。今後も利用者の気持ちを引き出して作品という形で残していけるように頑張っていきたいと思っております。ありがとうございました。





杉の子彩々展

10月9日(日)～18日(火)
9:00～17:00

日本画、水彩画、パステル画が会場一杯の作品の熱気に皆さん充分な手ごたえを感じたようでした。



明星大学生涯学習 陶芸講座展

10月9日(日)～18日(火)
9:00～17:00

2016年10月9日(日)～18日(火) 青梅市立美術館市民ギャラリーにおいて明星大学生涯学習陶芸講座展が開催されました。明星大学の生涯学習陶芸講座に集う20名の展示でしたが、ほとんどの方が10年を

超える受講歴ということで、作品も多彩でとても見応えのあるものでした。長く続いたこの講座も今年度を持って終了ということで最後の記念となる思い出深い展示会となりました。



ほとけさま乃かたち展

10月21日(金)～30日(日) 9:00～17:00

西武池袋コミュニティ・カレッジ(木・日曜教室)
朝日カルチャー立川教室、青梅 宗建寺教室(金・日曜教室)
セブンカルチャークラブ北砂教室

日頃教室に於いては、ほとけさまを彫るとは言わず仏像彫刻と言っているのだが、真の仏像彫刻は儀軌等々理解していなければ造り得ないもので、専門的にでもなかなか難しいものである。しかし(ほとけさま)と言うものは各自のなかにありその形を彫りだすことは何の制約もない、ましてや仏教は縁起を主とするものであり、今回展示会に出品する方々のなかには初心者もあり表題とした。人々に見せ得るものではないと渋る方も多く居られたが、やはり他の目に晒されると今まで気付かなかったことや他の縁が生ずることになり、広がりを見せることになる。狭義の像も悪くはないがより豊かな表現にするためには他の関わりがなければ成し得ない、ましてや仏教は縁起を主とするもの。この度の教室展示会はそのことだけでも(ほとけさま)との縁が深まったのではないだろうか。

南無聖名九拜



梅の小品展

11月3日(木)～13日(日) 9:00～17:00

11月3日から11月13日まで市民ギャラリーにおいて、梅の小品展、梅の写真展、ワークショップ作品の展示を行いました。

アートジャム参加作家の平面と立体の小品と、写真は一般公募とし、青梅市内で撮影した梅の写真を募りました。

ワークショップ作品は鈴木寿

一講師の指導による梅をテーマとした焼き物といった多様な展示でした。中でも伊藤光治郎の木彫や、奥野誠の石彫は素晴らしいもので、会場の雰囲気をもより一層高めてくれました。

梅の写真展

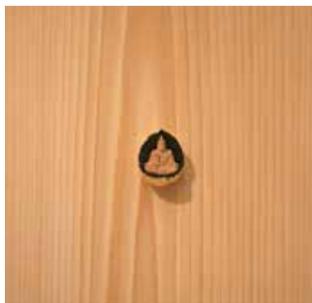
大木 勲 (青梅市滝ノ上町)

来住 野禮子 (新町)

川島 貴子 (河辺町)

亀田 諒 (梅郷)

片岡 元雄 (柚木町)



ワークショップ 作品展示





2016 青梅アート・ジャムギャラリートーク「梅に捧げる」—勅使河原 純 先生を招いて—
9月22日(木・祝) 14:00 ~ 16:00

はじめ

松島:皆様、今日はお集まり頂きまして誠にありがとうございます。出品作家によるギャラリートークで興味深いお話が聞けるといいますので、お楽しみ頂けたら幸いです。時間は午後2時から4時まで、また随時見に来る方もいらっしゃるかと思います。それでは青梅アートジャムの実行委員長である杉本洋より挨拶致します。

杉本:今日はお集まり頂きありがとうございます。今日はですね、評論家の勅使河原先生に司会を頂いて、この青梅アートジャムと展示している作品を踏まえて、色々なお話を僕らから引き出して頂いて、楽しいトーク時間を持てればと思っていますので、よろしくお願い致します。

松島:それでは、続いて本日のギャラリートークを「みんなで話そう梅に捧げる」と題しまして、勅使河原純先生を招いて、司会進行をお

願い致します。勅使河原先生は元世田谷美術館の館長を歴任され、現在は美術評論家兼「JT-ART-OFFICE」の代表でいらっしゃいます。それではよろしく願い致します。
勅使河原:はい、皆さんこんにちは。早速ギャラリートークを始めたいと思います。今回の出品作家は19人でいらっしゃいますよね。全員お集まりではないようですが、いらっしゃる方を中心にお話を進めていきたいと思ひます。一人当たりの時間がかなりゆつたりとしそうです。テーマは「梅に捧げる」ということですよね。それを聞いて「しめた!」と思う人も「しまった!」と感じる方もいらっしゃると思うんですが、その成果を早速見て参りたいなと思ひます。それでは、石彫の方、この今いる部屋からスタートしていきます。見回したところ江見先生だけがいらっしゃいますので(笑) 江見先生、よろしく願い致します。

自然と文明の狭間

「廃屋の切られた梅を見つめる禁漁区と水源林の立ち標識」というタイトルですね。パッと説明的に私が見ると、梅の木がこちらにあって、向こうにそれを凝視している人のような存在がこう配置しているように見えて、それでこの両者の間の空間が結構大事なんで、それを固定するためにわざわざ台座が用意されたという風に見えるんですけど、どうでしょうか?

江見:はい、その空間というのが私にとっては重要なんですけれども、ちょっと能舞台のつもりでやっただけなんです。この丸太になった梅の木なんですが、廃屋の横に伸び放題の梅があると思って下さい。その梅を切られて丸太の状態に積まれている、その対面に立ち標識って言うんですかね。ちょっと崩れかけたような水源林と禁漁区、文字はあとには無いんですけどね、そう言う立ち標識があつて、切られていく様子や廃屋の様子を見てるんですかね。それでそこに私が行って、その光景を見るわけですね。そのときに、私がこちらの梅を見ていて同化したような感じを出すために擬人化したんです。

勅使河原:その擬人化があるから能舞台というのができたんですか?

江見:いいえ、文字が書いてあるということで、社会というんですかね、文明社会の一番、目立たないところにある端っこのような気がするんですけど、それに対して切られた梅って言う、これも人間がいつかそんなに前じゃないんですけども、切った文明の名残としてあると、その場所の静けさ、静かな中に時間が流れている、その時間って言うのが現代の文明に通じたり、未来がちよつと見えてみたりね、それで私の制作意欲がちよつとかき立てられた、そういう静かな場面です。

勅使河原:なるほど、今回梅に捧ぐというテーマなんですけれども、それには当然梅の木が切られてしまったという大事件があるわけですよね? そのことを一番ストレートに表現したというか、これだけの作家の中で最も真正面から見たのが、江見さんの作品だと思ひますね。

江見:たまたま出くわしたんです。この梅が切られただけじゃなくて、



丸太になって転がっているって言うところに。

勅使河原:質問や感想のある方は、手を挙げなくても良いのでどんどん発言して下さい。今回後でそういう場を設けることが無いので、思いついたら瞬時に言って下さいね。
江見さんの作品は今までブロンズで、割と形から出発するんですけど、形以上の思想性というのか、そういうところまでするような作品が多かったと思ひます。今回もなかなか構造も複雑だし、表現としても高度ですよ。向こうのはブロンズですか?

江見:はい、そうです。

勅使河原:それに対してこちらが?

江見:こちらはブロンズにもできたんですけど、粘土で原型を作って石膏取りした時に、その白さが、切られた梅の存在が幽霊のような魂のような感じにするために、ちよつどいいんじゃないのかと思ひました。ブロンズにしたら重量感があつて、ちよつと感じが違ってくるんじゃないかと思ひました。それで白い石膏のままにしました。

勅使河原:そういう発想で作られて、出来上がったのが意図通り(笑) じゃないですか。それがとても素晴らしいと思ひます。他に何かありますか?

— すみません。あそこの作品(道標)もそうですよね?

江見:はい、道標というのは道しるべですが、山歩きなどしていると所々に表示が出るんですね。それはやはり自分の行き先を暗示するような何か意味があると私は思ひました。今ちよつとテーマにしようかなと思ひます。

勅使河原:他にどなたか無いでしょうか。滅多に無いチャンスですから…はい、無ければとりあえずまた戻ってきてもいいですから、次に行きましょう。

梅神様と梅の妖精

勅使河原:どうぞ、田中さんは梅というテーマが石彫家には非常に厳しいと仰っていましたが、ちゃんと神話を取り入れて、梅の…神様ですか? お姫様?

田中:あー神様かもしれないですね。

勅使河原:そういう造形にまとめられたところがね、素晴らしいですよ。梅がここと…これもそうですか? ご説明頂いても良いですか。

田中:ええとね、大体こう石垣みたいなのが彫ってあるんですけど、この石自体は石の彫る行程みたいなのを表面に表して、磨いたところとか、鑿で叩いたところとか、これを梅の木の肌に見立てて、その中から梅のお姫様が生まれ出た、ということなんです。かぐや姫じゃないけれど、梅の木を切つて出てきたような感じで、頭の上と胸のところ梅の花は、冠と心の意味で表して、お姫様というか蟲というか、そういうものを表した感じですね。

勅使河原:いやあ、失礼な言い方ですが、田中さんを見てると、こういう可愛い造形が出て来ると



はちよつと思えないんですね、意表をつかれますよね。

田中:すみません変なの作つて。

勅使河原:いえいえ、ただ石を彫るって、絵を描くのとは違ってものすごく時間かかるわけでしょう?

田中:まあ、かかると言えばかかりますね。

勅使河原:かかりますよね。それがお題をこうやってあしらつて作るというところが、まずもって田中さんの優しさと言うか、誠実さかな、と思ひますけどどうでしょう?

田中:そうでもないですけど、まあ僕が作ればこんな風になるのかなあつて感じて作りましたね。

勅使河原:やっぱり技術は自己表現であると同時に、相手に伝えなきゃ行けないって役目もあるので、その辺が今のようない「梅のテーマ」だからどこかに入れるぞつて言う誠意が、やっぱり大事ですよ。

田中:僕は宮崎出身なんですけど、隣町が木花つていうところして、

このはなまきり姫という日本書紀に出てくる神様にゆかりのあるところなんですけど、宮崎には結構多いんですね。だからこの作品は「梅の花咲耶姫」にしちやつたんですけど、まあ故郷が故郷だけにちよつとじつつかもかもしれませんが…。

勅使河原:いえいえ、それともうひとつ、磨いた部分と叩き出した部分とのバランスがありますよね。

田中:そうですね。それで黒御影石を使うのが好きなんですけど、鑿跡のところ白くなって、磨いたところは黒くなつたり、そういう表情が出るものですから、ほとんどの作品で使っていますね。

勅使河原:他の石だとはならないんですか?

田中:大理石とかは白いままだから、磨いたところもちよつと模様が出るくらいであまり区別がつかないですからね。

勅使河原:どなたかご質問ありましたらどうぞ。…ええと、こちらと向こうのふたつ出て来ているのはなんですか?

田中:あの、向こうは花姫っていうんですけど、あまり根拠は無いですが、花の中にいる虫を想像して作っていますね。

勅使河原:じゃあこれは、田中さん流の妖精みたいなものではないか?

田中: ああ、そうかもしれませんね。良く言えばね。

勅使河原: 妖精だね、羽がつくんですよね。

田中: ああそうですね。これは羽みたいに見えるんですが…今度は羽付けましょうね(笑)。

勅使河原: ありがとうございます。えーと他に質問は…はい、なければまた戻って行ってことで…まだいらっやっってないですか？

— はい、今向かっています。

勅使河原: そうですか。これもやっぱり本人に是非聞きたいですよ。ではいらっやっってからまた戻ってきましょう。

梅の種と個人番号

勅使河原: ええと、私からぱっと見ると、梅の種が木に埋め込まれていて、もう一回種から芽が出て来る再生の意味に捉えたんですが。

山口: はい、自分で皆食べたんですね。その種を使って去年ぐらいから、梅干しを作ったり、梅ジャムを作ったりして自分で食べたものだけを使って作品を作りました。

勅使河原: 相当梅干し好きですね。

山口: いやあ、大変でした(笑)。普段は全然食べないんですけど、材料のために少し頑張って無理して集めましたね。梅がテーマですし、木彫で何ができるかと思って、最初は天神様でも彫ろうかと思ったんですが、時間がどんどん迫ってしまっていて、種を使って何か面白いことができないかと思って、挑戦してみました。



勅使河原: ずいぶんこれ、抽象的な思い切った表現になりましたね。普段はやりますか？

山口: いやあ、学生の頃にはよくやりましたが、今回久しぶりにやりましたね。最近始まったマイナンバーなんかに対して何と無しにいやーな気持ちを持ったことから始めて、この中にマイナンバーとか、銀行の口座番号、暗証番号、パスワードとかの自分に関する番号をこの種に書いて、全部さらしてみました。

勅使河原: ああ、そうなんですか！なんだかマイナンバーと言われると、すごい管理社会の象徴みたいに感じますね。

— 何かな、暗号？ 梵字みたいですね。

山口: はい、数字です。日本で普段使っている数字じゃありません。他の国の数字を使っています。

— じゃあ解説すればわかるのかな。

山口: はい、読めれば自分のマイナンバー、暗証番号、電話番号も全てわかっちゃいますね(笑)。ひとつ大きなものを忘れたのが、クレジットカードの番号ですかね。

勅使河原: プライベート、個人情報の塔ですね。

山口: 食べたものだけ個人情報です。

勅使河原: こっちに広がってるのはなんですか？

山口: あ、これは余りです(笑)。

勅使河原: 余りですか。いやこれ一生懸命考えたんですよ。これとはかくこの広がってるのは一体何を意味するのかなって。

山口: 周りにぼろぼろこぼれ落ちたのがあって、少し空間が広がるかなと思いで…。

勅使河原: で、これが黒く塗られて…こちらは金？ 銀かな？

山口: 黒ではないです。漆を塗って銀箔を貼ったものです。

勅使河原: ああ、これ漆ですか！

山口: いや、ここは普通の塗料なんですけど、種は全部漆を塗って加工しました。

勅使河原: やっぱ主張というか、日頃の鍛錬が出ますね。

山口: いや、初めての挑戦です今回は。

勅使河原: 作品はこれと、こちらですね…。これはなんと言うか、今までの流れを感じるかな、という気がしますが…。

山口: 学生のときに梅の木の木肌を型取りしたものがあって、それをブロンズにしたものと、あ

とこっちは樹脂でかたどったもの、これも漆ですね。箔押ししてみたりとか…。せっかく昔取った梅の木型の型ですので、使うチャンスだと思いました。

勅使河原: 梅の形見というか、思い出というかね。

山口: そうですね。作品にも何にもなっていなかったものですが、やっと今回何かしらの作品にはなったと思います。

勅使河原: 何かで質問というか感想…感想が良いですね。

— 個人情報なんて聞かなきやわからなかったですね。想像もありませんでした。この梅の食べ物の写真を配られたわけは？

山口: あっそれは自分の食べた物です。一応こうやって梅を漬けたり梅干しにしたり、ジャムにしたりして…。

— 自分で作ったんですか？
— これからこの種が繋がっていったんですね。
— 全部じゃないでしょう。

山口: はい、これで全部じゃないですね。



— 写真を置いておけばいいんじゃないですか。

山口: いや置いておくと説明的すぎるかと思って、今回はこれだけにしました。

変化する手回しアニメ

杉本: 次はうるまでるびさんですが、今日はいらっやらないので、簡単にご説明だけさせて頂きます。これはこの(壁に映したアニメーションの前の)レバーを一定の回数以上に回転させると、次のアニメーションに切り替わるようになっていきます。静止した絵が動くようになっている作品で、「おしりかじり虫」とかを制作したアニメーターの方ですね。

(少し時間を置き、作品のアニメーションを見ていく。時間を置くと変わるようになっている)

— 何パターンくらいありますか？

杉本: 5、6パターンはあると思いますね。回し方を逆にするとこの空とか雲とかが逆に回るようになっていきます。梅との関係を今日伺おうかと思ってたんですが、ご本人が来られないのでちょっと残念でしたね。

勅使河原: アニメーターの人が登場するのは初めてですよ。今までの作品と大分趣が違って、面白いですね。



杉本: そうですね。予算が無かったので、この感じが精一杯ということでしたので、もう少しあれば、色々な仕掛けをしたもので見て頂けるかと思って、今回はこれだけにしました。

勅使河原: この方は国際的にも活躍されてますよね。それでまあ…変な言い方すれば大当たりしてるわけですよ。だから、どうやったらこういう表現で海外の人にまで支持されるような大当たりが取れるのか、を是非伺いたかったのですが、残念ですね。

同じ美術というか、ジャンルでもね、イラストとかこういうデザイン系の要素があるのは、非常に産業化してお金に換わる可能性があるし、日頃思いつかないようなお話が多分聞けると思うんですけど、まあこの作品から類推して、私なんかはどこら辺が国境を越えて当たるのかっていうのは解明できませんね。どなたか「これはこれがいいんだ!」っていうのをご指摘頂けませんか？

…まあだけど、この表現に来るまでものすごい古い美術もちゃんと調査してるようだし、音楽もしっかり合ったのがついてるし、努力は大変なものですよ。

杉本: 色々な新技術を開発したりとか、全身ブルーだったかグリーンだったかのタイツでバックを全部揃えたりというところで、LEDみたいなのを体中につけて、動いたポイントでアニメーションの人物が動いていとか、そういうのもNHKの番組の中で「これはこういうふう



にして動いてるんだよ」って説明して頂いたことがあるんですけど、詳しく説明して頂けば頂く程わからなくなってしまう(笑)。難しい言葉も沢山出て来るから、本人が言って頂く方がいいんですけどね。今ちょうど原宿の方でも展覧会をやっていたりして、そちらにどうして今日は行かなくちゃならなかったみたいですね。

勅使河原: ファイン・アートの方から見ると、是非ここで学びたいのはやはり時間の要素ですよ。今、美術の中に時間をどう取り入れたり、あるいはどう取り上げるのがいかに相変わらず問題になってますから、時空っていうのがアートでもすごく大事なんで…。全ての絵画には時間があるんですよ。マチスだけが時間を取っちゃった。どうやったかという、絵で大時計を描いて数字を振るんだけど、針が無い。私の絵には時間が無いんだと、そう主張したんですよ。その次には天井の壁も床も、全部同じ赤一色で塗っちゃう。空間が無いんだと言い始めて、時空との戦いを宣言したんですね。そういうのもありますが、まさに時間を意識的に突っ込んでいくとこうなっ

ていって感じかなと思いますね。

— まさかこれから取ったものを彫ったわけじゃないよね。

— まさかこれから取ったものを彫ったわけじゃないよね。

梅に広がる銀河

杉本: (奥野さんが) 今日体調が悪いから来られないみたいですね。

勅使河原: あ、そうですね…。どなたか親しい方は…いらっやらな

いみたいですね。では質問ですが、これは天然石そのままですか、それとも彫ってあるんですか？

(本人不在のため、同じジャンルの田中さんが説明していきます)

田中: 石をね、半分は割って、あとは石垣風にしてあるけど…。

勅使河原: ああ、やってあるんですね。なるほど!

田中: 本人がどういうつもりでやっているのかわからないけど。中が空洞になって、えーと…梅の木を切った跡かどうか知らないですけど…。中身の石の部分も「仁」という作品にして御岳山の方で展示してありますけど。

— ああ、じゃああれと繋がってるんですね。

田中: 梅干しの実をイメージして、種の中の仁の部分に向かって、この中に入れられるという…だからここと向こうとの繋がりとこととで考えて作ったんですね。

— まさかこれから取ったものを彫ったわけじゃないよね。

田中: 多分違うと思うね。

杉本: それでこの布が銀河をイメージしてるという話でしたね。タイトルが「梅銀河」ということでしたから。



勅使河原：銀河！なるほど…。じゃあこれは梅であると同時に星座とか、そういうものでもあるんですね。

田中：石の模様と、白い点々を星に見立ててるのかもしれないですね。

勅使河原：そう言われると、急に現実感が増して来て、見方がガラッと変わりますね。私が非常に気になるというか、すごいと思うのは、この磨いた部分がね、この石の中から浮かび上がってくるように見えるじゃないですか。それはどうしてそういう風に見えるようになってるのかな、この辺の彫り方に何か秘密があるんですか？

田中：段々と磨くとこうなっちゃうんですけど、段々と色を抑えていて、磨きを抑えているんですね。

— 石彫のぼかしということですか？

田中：そうですね。石の磨き方や、こっちは「びしゃんがけ」っていうんですけど（びしゃん＝石材やコンクリートの表面を加工する時に使う鉄槌）。こっちは刃でかけてあるんですけど、その後この辺は粗砥していて、その後で仕上げているんですけどそれで空間の広がりを見せているのかもしれないですね。色的な感じで…。

勅使河原：これ、ひと目見るとそのままやり過ぎてしまっそうなん

です。日本の文化とか、そういうものを海外に配信する「ヨーロッパ写真通信社」の日本社長を務めた後、作家として独立して、こういう日本のお祭りだとか、季節の風物詩のようなものを撮って、通常の写真として海外に送ったりする仕事をしていて、先月か先月にも彼の作品が取り上げられたりしています。

勅使河原：この間の懇親会のととき、割ってあるとか中がくり抜いてあるとか聞くとどんどんはまっていきそうな造形ですよね。不思議な魅力があって、造形の最も原始的な感じですね。そしたら星座や宇宙ですけど…すごいいいですね。ありがとうございます。それだけ聞かせてもらったら大分わかりました。

田中：僕は想像で言ってるんですけどね（笑）。

光の絵画 湿版写真

勅使河原：特色のある作品ですね。

杉本：この作品は、写真家のエヴァレット・ブラウンの作品で、「湿板写真」という、彼が言うには幕末初期くらいまで使われていた技法をフィルムに貼って、えんじのプランターとか、そういうのが一つの特色ですね。本来なら出したいのがこういう風になっちゃうって言う写真を逆手に取ってこういう作品にしているんです。2年程前の文化庁長官賞を受賞した作品でもあるん

伊藤：展示の並び順が逆になっているんですけど、何代か前の曾祖父が誰かがペリーと一緒に日本に来て、日本の風景写真を撮っていったそ



勅使河原：あ、そうなんですか。

伊藤：1、2と振ってしまったそうなんですけど、彼はこっちから梅の花が咲いて、だんだん梅の実になって梅干しになるって言うストーリーがあったみたいなんです。

勅使河原：あ、ストーリーがあるんですね。ということで見て下さい（笑）。なるほど、梅干しだったんですね。

伊藤：これがまだ、梅が咲いてない状態なんですよ。それで花開いてってなっていくわけです。

勅使河原：いやあ、デリケートですね。これなんかきつと日本人が忘れてる日本の感覚ですよ。

杉本：ご本人は自分のことを「客人（まれびと）」って言ってるんです。

勅使河原：これを見ると、なんだか幕末の武士の目で、梅を見ているような気がしてきますね。

杉本：彼の先祖、と彼は言ってますけど、何代か前の曾祖父が誰かがペリーと一緒に日本に来て、日本の風景写真を撮っていったそ

うです。だから自分がこうして日本で写真を撮っているのも、何か縁があるのではないかと以前話していましたね。

道の形と墨の色

杉本：こちらは今回、後ほど紹介する井上さんと、うるまさんと一緒に文化庁の文化交流使と言って、海外で色々作品を発表している書家の海老原露巖さんです。「梅」って書くのが悩んで、それだと直接的すぎるので「道」という字を選んだのですが、その道に辿り着くまでのストーリーがあり、ご自分のギャラリートークのときにお話するそうです。この使われている墨は乾隆墨（中国清朝時代に、乾隆帝の命によって製作された墨）か何かだそうですね。

勅使河原：黒さが違うんですかね？

杉本：そうですね。その黒さを出すのにもちよつと秘訣があるらしいんですけど、普通に磨っても出ないそうです。

勅使河原：まずあの、字から言うとね、今の書ってあまり字が読めないじゃないですか。だけれどこの場合はね、徹底的に崩しながらなんとか読めるんだよね。そここのころの字の意識って言うのが非常に、私からすると…暴れているように、しっかりと暴れない部分と言うか伝統を踏まえたところがあって、それが好ましいなと。それから中国人の書って読める

んですよ。平仮名でも草書でも、草書っていうか狂ったように崩す「狂書」っていう段階に至っても、中国人の書は日本人は読める、だけれど日本人の書はほとんど読めないんですよ。そう言う意味ではこの書家としての独特のスタンスがあるんだなって思いますね。

それからもしご本人がいたら、どうして「道」って言う字を選んだのかは是非とも聞きたいですね。私はいないから言いますけど、道がない「無道」の方が良いんじゃないかと思えますけどね（笑）。いやそうじゃない、とは非聞きかたつたですね。

それから墨の色、やっぱり墨の黒に対して、もう少し作家たちが意識がしたほうが良いとは思いますが、つまり黒さを出す、石彫もさっき「磨いて黒くなって叩いて白くなる」という白黒の世界のことをちろつと仰いましたよね。そういうところでアーティスト皆白黒にはものすごくこだわるし、工夫もあるし勝負どころですよ。これは先生の作品ではゆっくり聞かせて下さい。そういう点ではこの方もしっかりと黒が出てて、多分墨の磨り方も全然想像つかないようなことやってると思えますね。例えば墨を煮ちゃうとかね。

それから紙じゃなく布ね、この墨と筆と布っていう自然の素材が出て来るっていうのはやはり聞きかたつたけど。どうして紙ではないのか等、きつと色々あると思えます。杉本先生、字についてちよつと日頃思っていることを聞かせてくれませんか？

それから紙じゃなく布ね、この墨と筆と布っていう自然の素材が出て来るっていうのはやはり聞きかたつたけど。どうして紙ではないのか等、きつと色々あると思えます。杉本先生、字についてちよつと日頃思っていることを聞かせてくれませんか？



杉本：いやいや、僕は字の方は全然だめなんですけれど、その墨色っていうと、よくこういう一字の書を書くときっていうのはね、墨汁と墨を混ぜるような形の一字書とは違う墨色が出たり、滲みのところの色とかを見てもちよつと違う発色をしているのが印象的なんだなと思えますけどね。かなり大胆に使っていますよね。僕はとてもこういう墨をこんな風には使えないです。目が飛び出るような値段ですからね（笑）。10万 20万円では届かない、普通に考えられないような世界ですから…。

勅使河原：ついでに聞きますけど、墨の色って言うのはどんな風に表現していますか？

杉本：それぞれの作家が工夫してやられているので、本当のところは言わないですよ。言うとも真似されちゃいますからね。

勅使河原：墨汁で書くような印象になるんでしょうか？

杉本：それはもう、カーボンのような、黒いと言ってもランプブラックのようなベタ黒の、技術的な色になっていきますね。

勅使河原：全然違うんですね。並べてみないとわからないですか？

杉本：そうですね。

ご飯と梅干しの器

鈴木（寿）：はい、ちよつと申し訳ないような気持ちなんですけど、普段は皆さんご存知の通り食器とかばかり作っているの、美術館の展示という困ってしまうんです。今回はテーマがしっかりあったので、それに向かっていけばいいかなと思って、ご覧の通りで茶碗にたつぷりのご飯と、その上に梅干しということで、（梅の伐採は）ちよつと悲しい出来事だったんですけど、なるべく皆に元気になってもらいたいなと思って、ご飯を食べれば元気になるので、大勢で気持ちを共有するとか、皆で頑張ろうみたいな気持ちを込めて沢山並べて、前向きというか未来志向で、タイトルを「梅の種」ってしたんですけど、種があればまたそこから始まるので、一から頑張ろうとか…そういう思いやメッセージを込めて作ってみました。

勅使河原：先週、「東日本大震災復興支援展」というのを仙台で



勅使河原：先週、「東日本大震災復興支援展」というのを仙台で

やってきたんですけど、こういう元気に作品を先生に出して頂きたかったですね。向こうではね、魚を獲る大漁の絵を用意したんですよ。やっぱり魚が獲れないと元気が出ない、けどもう一つは放射能とかのことを考えると、やっぱりご飯ですよ。それがやっぱり日本人の元気の素って感じですね。それがこういう風に造形化されると感激しますね。日頃やっておられる白い釉薬の作品とこれとの関わりはありますか？

鈴木(寿): (蓋を持ち上げて) このご飯が一応蓋になっていて(笑)。仏壇にこう、ご飯の用意なんかもできるんですが…。

勅使河原: あ、そうなんですか！さすが陶芸家ですね。目の付け所が違いますね！

鈴木(寿): 普段は粉引(褐色の素地の上に白化粧土を施したもの)なんですけど、このご飯の型を取る時に、粘土は焼くと縮むので、ご飯をそのまま作っちゃうと小さく縮んだ米粒になるので、日本で一番大粒のお米っていうのを見つけました。それを焼いて収縮するとちょうどいい大きさになります。それでその白化粧っていうのは普通に型を取ると抜け勾配(鑄型を抜き取りやすくなるための傾斜)と形なので抜けないんですよ。なのでまずその白化粧っていうのを先に米の粒の内側に染み込ませ

せて、半分だけ上が抜けるように、ちょっとだけ細工をして、一応そういう無理やりなことをしました。表には出ないんですけど、そういう形で普段やっている技法も少し取り入れています。

勅使河原: いや、お話聞いてるとね、魯山人が星ヶ岡茶寮でやったことってまさにこれだな、というふうに思いますよね。

食通を集めて料亭で一食差し上げるわけじゃないですか。その時にまず来たお客さんを驚かすというように、焼き物で驚かすと、そうするとこういうのがいいですよ。席ついた時にご飯が乗ってる…と思ったら蓋だった(笑)。となりますから。これちょっとあとで取ってみて下さい、感激しますよ！ こういう目と、触覚と、様々な感覚を総動員して、焼き物や食に親しむ、これがいいねえ…(笑)。それで気に入ったら器ごと買って帰って、つてきますよね。まあ星ヶ岡の商売の仕方ですよ。この外の茶碗には何か秘密があるんですか？

鈴木(寿): 特にはないです。いつも白い茶碗ばかり作っているの、今回は梅干しをいかに見せるかってことを考えて茶色にしました。

勅使河原: これはなんという釉薬なんですか？

鈴木(寿): よくあるんですけど、透明な釉薬に鉄分というか、粘土で

入れるんですけど、もう少し具体的にいうと黄土っていう、よく中国から飛んでくる黄砂の一種の黄色い土があって、それを釉薬に混ぜるとこういう色になります。

勅使河原: これだけの数があれば、ここに人全員の分かなえますね(笑)。まだまだこれ作ろうと思えばずっと作っていきませんか？

鈴木(寿): そうですよ(笑)。やる気があれば…。

勅使河原: 是非どこかの料亭に売り込みたいですね！

— 梅干しの型はいくつくらい作ったんですか？

鈴木(寿): 3つです。

— この梅干しは本物ですか？粘土ですか？

鈴木(寿): 本物から型をとりました。自分で漬けた梅干しです。

— 何の梅を元にしたんですか？

鈴木(寿): 南高梅です。大きいものにしたかったの、これは縮んでいるから元はもう少し大きいです。向きを変えたりすると同じ梅干しでも違った形に見えてきますが、型としては3つですね。

— 数には何か意味があるんですか？

鈴木(寿): いや、始めにこの台が自分の手元にあったので、本当はもうちょっとやりたかったんですけど、スペースとかも考えてこれくらいの数がちょうどいいかと思いました。正方形で並べたいと思ったのでね。



— 梅の色がすごく梅っぽいんですけどね。着色は釉薬なんですか？

鈴木(寿): えっと、ちょっと大げさに言うと、柿右衛門の赤と同じで、上絵っていうのがあって、焼きあがった時点ではご飯と同じような白なんですけど、それに後からもう一回色をつけて焼くんです。もう少し黄色みのある赤を狙ったんですけど、ちょっと赤くなりすぎたかなって、そこは反省点なんですけどね。たまたまライトが黄色かったので良かったですね。

勅使河原: これ、中にはどんなご飯入れたらいいですかね(笑)。

鈴木(寿): あー…ご飯に限らず、何でも自由に入れて頂けたら…。

勅使河原: お吸い物とかでもいいんですけどね(笑)。ご飯と見えた汁とか…。

— 煮物とかでもね。

勅使河原: 食品サンプルとも言えますしね、どう理解していいのかわからない。アートの無限の広がりを感じますね。では何かで質問があったら…。

— ご飯に梅干しをくっつけているんですか？ それとも粘土の段階で一つになるようにしたんですか？

鈴木(寿): 別々に作りました。釉薬は溶けて固まるので、乗せておくと勝手にくっつきます。



— 他の食品サンプルに応用ってできるんですか？

鈴木(寿): はい、やろうと思えばいろいろできると思うんですけど…。

— カレーライスに被せたりとか…。

鈴木(寿): あー、カレーライスならリアルなのができそうですけどね。

勅使河原: でもカレーでは蓋にはならないですね。いやでも本当にこれは何とも言えないですね。

鈴木(寿): 茶碗の方も手を抜かず、に作ったので、茶碗も見ると嬉しいです(笑)。

鉄製の建造物群

勅使河原: 漫画に「鉄腕アトム」というのがありますが、この人は

「鉄人」ですね。もう朝から晩まで鉄鉄をどうやって手懐けるか、どうやって鉄を作るか、っていうことにかけているように見えるんですけど、どうでしょう？

青野: えーと、まあ僕は一つと鉄に魅せられて、40年近くずっと鉄をやっているんですけど、ずっと今まで皆さんの作品を見ていて、みなさん本当に誠実に梅のテーマを表現されていらしたの、ちょっと恥ずかしくなっちゃって。僕はもう青梅には15年くらい住んで、梅は割と身近にありまして、春になると家の前の臨川庭園っていう素晴らしい庭園がありまして、枝垂れ梅が本当に毎年咲いて素晴らしいです…。

梅の公園にも一度だけ行ったことがあるんですけど、青梅って梅が綺麗な街だっというのがわかっていたんですけど、自分の家の前の枝垂れ梅がもし切られたら、相当また、思い入れも全然変わってきたと思うんですけど、その梅は運良く切られずに残ったので、あまり自分としては、青梅の梅がどんどんどんどん切られてるっていうのが感じられなくて。僕が一番「梅が切られるぞ」って言われた時すぐ頭に浮かんだのが、薪ストーブを持っているので、いっぱい薪が出るかなって

思ったんですよ。それで青梅市の方に聞いてみたら、ウイルスのある梅の木は一切渡せないということで、厳重に薪ストーブで燃すって言うのもだめだったんですね。一般の人には譲れないので、だからそういう切られた梅見ると、焼却炉で燃すのかはわからないのですが、その時一瞬「可哀相だな、寂しいな」っていうのがあったんですけどね。

ただまあ、この作品のテーマっていうのが僕はずっと「形あるものは時間とともに減っていく」という時間経過しても、長いスパンで鉄が徐々に錆びて時間が経過するってことを表現したくてずっと鉄でやっているんですけど、まあ後、皆さん梅が切られるっていうことにかかなり衝撃を受けて素晴らしいね。その辺にインスパイアされた作品がかなり今回あったと思うんですが、僕はあまり衝撃を受けなかったの、この可愛い一輪くらいしかできなかったんですけど。この作品に関しましては要するに、時間とともにものは壊れていくということで、遺跡なんかも時間とともに風化して行きますが、昨今バーミヤンの大仏が壊れたりとか、イランやシリアの立派な遺跡が人為的に壊されていくっていう、僕はどちらかというその方が衝撃で、そういう意味で僕が作った作品を並べて自分のなその…以前にも6、7メートルくらいのを10点近く作ってるんですけど、一人世界遺産って言うんですけど(笑)。こういうものを作りながら

そういう(風化の)時間っていうのに興味がありまして、ただ人為的に破壊されるっていうのはどうしても納得できなくて、そういうところを表現したいっていうのがあって、梅とはちょっと違いますが、どうして人間はそういう長く持った文化遺産を簡単に壊してしまうのか理解できなくて、なんとかそれが止まればいいという願いを込めて作りました。

勅使河原: 今世界を見るとね、文化そのものを壊そうという、人間を殺そうだけじゃなくて文化を敵にするというね、すごい状況になっちゃってるから、なんとかアーティストが踏ん張らないといけませんよね。

青野: 今日はちょっと全体にあらんですけど、なかなか説明にならなかったの、少し良ければ…

(作品を叩いて音楽を鳴らす。曲が終わると拍手喝采)

勅使河原: 結構青野さんの作品にはファンがついてるんだよね。

青野: 一般の作品はあまり売れないんですけど、個展なんかをやると付き合いで買って下さる方がいて、僕いつも言ってるんですけどこれ女子高生なんですよ、女学生って言ってるんですけど人身売買みたいで申し訳ないと思いつつ、作品が売れないから頑張ってるんですけどね、って感じていつも売ってま(笑)。1クラス分くらいだから40人くらいになっちゃって。

勅使河原: 本人の話と、ファンのお話とね、私両方から声が聞こえるんですけど、なかなかこれが噛み合っていないんだよね。そこが面白いというか不思議というか、以前小学校で展示をやりましたよね。小学校の校舎の中で、こういう状態で



展示をしたら子供達がわーっと寄ってきて、楽しんでくれたんです。中でも突出して子供っぽかったのが作者本人で(笑) 青野さんは小学生より小学生っぽいんですね。この飛行機や戦車に、今の子供たちよりずっとずっと執着していますからね。

青野：本当は戦車 1,000 台、尖閣諸島って思ってたんですけど、183 台で今止まっているんです。

勅使河原：時々「自然体であれ」って生意気に作家に言ったりするんだけど、青野さんは誰よりも自然体なんで、言葉がないというか、作品も気取ってないんですよ。素朴というか、普通素朴っていうか「素朴らしく見せよう」っていう気取りの一種なんだけど、そういうものでない素朴派を不思議に実現されてる感じがして、素晴らしいと思ってます。

青野：義援展のがまだ下に残りますので、是非お願いします(笑)

勅使河原：人身売買を勧める以外に、何か聞きたいことはありますか？青野さんもまだ言い足りなかったら…。

青野：演奏もさせてもらったので、僕はもう十分です。

レストランのトイレ男女サインを依頼されたんです。それで僕はこれと似たようなおじさんの作品を提案したんですが、それは品がないって却下されて、形の違うものが料亭に収められたんですけど、それを作る時に「ああ、これは面白いな」って自分で思ったんですね。

それでたまたま2ヶ月後、銀座で個展があったのでちょっと作ろうと思って、作り始めると数が気にならなくなるので、数えもせずに作れるだけ作って、ギャラリーに持って行って夜中の2時くらいまで壁に設置したら綺麗に収まったんですよ。それでこれだけ綺麗に収まったのはなんでかなって思ってたんですけど、108 個あったんですよ。ちょっとびっくりましたよ。「ああ、おじさんの煩惱だ」って思って(笑)。

それで割とこういうものもやりたくて、だからこれもね、時代があって初期のはおばさんみたいにスカートが長くて、それがだんだん短くなったりとか、短くなると若い子とかに色々聞いて、「これぐらいならまだ大丈夫かな？」って言うか「まだ大丈夫だよ!」とか「もうちょっと短くできるよ」とか言ってもらいます。そんなわけなので、あまり頭のいい話はできないんですけど…。

森の映像と記憶

— (今までの作品は) 結構戦争につながる作品が多いですけど、なんで今回はこれ(女学生)を作ったんですか？

青野：他の作家さんは脳みそ使って考えていると思うんですが、僕ほとんど脳みそ動いてなくて。たまたまこれを作ったきっかけは、今日はちょっとおじさん(の形の作品) がないんですけど銀座で個展をやった時に、銀座の

けながら仕事をしているんですけど、その時は日本にいて、テレビからいろんなものが流れてきて、人々の生活や営みや音やものや、人々そのものが木の葉のように流れていく状況を見るうちに、その状況は忘れてはないんですけど、それから少し経った2012年に私は東北に行きまして、宮古島から福島までだったんですが、東京のそばまで海岸線を見ながら全部歩いてきました。その時に見た情景とかか自分の中で合いまして、その前は自然とか、タイトルが森なんですけど、そういうものを題にして仕事をしたことがなかったのですが、作家として自分は表明したいと思って、これは日本とドイツとそれぞれに交流の物語がある森なんです。

それでこれは布に、シルバーゼラチンプリントと言う定着方法を使ってまして、普通に写真を紙焼きするときと同じように暗室で仕事をするわけなんです。それでこの森なんかはドイツの戦場だった森とか、そういう森を戒めとしてやっています。自然の光と影とか、圧倒的な力とか、有史以来、人々がそのようにして自然と付き合ってきたのか、そういうことを自分なりに考えて、そしてこれから未来に向けて何か発信できたらいいなと思って制作しています。

勅使河原：この中には日本の風景もあるんですか？

井上：はい、これです。



勅使河原：これの物語はなんですか？

井上：私は今奈良に住んでいますので、これは奈良なんですけど、この森の中はかなり荒れていました。太古の森なんですけど、それがもう、ドーンと倒れていって、私の中でもう人間の生とか死とか循環とか再生とかという言葉が頭の中を飛び交って、制作した作品です。こちらは中西部のドイツなんですけど、なんだかも化石のように倒れて傷ついた木が積み重なっていました。

勅使河原：自然を見る時に、ただそれが美しい景色だということだけでは済まなくて、太古まで遡っていくといろんなものが積み重なって、悲惨な部分もあるし悲しい物語も見えてくると、そういうことを重層的に表していきたいということですね。

井上：はい、そう考えています。それで記憶というものと現代というものをどういう風に表現できるかっていうのを、まあ自分の中で思ってるんですけど、過去のことを、未来に向けてどうしていくかっていうのを考えて、発信していきたいと思っています、人類がありとあらゆるエネルギーを使い切っていて、地球そのものが悲鳴をあげているんだと思いますから、いろんなところに行くとかやっぱりそう思うんですね。

勅使河原：そういう観点で世の中を見渡すと、やっぱりそういうもの



が見えやすい場所とか、特異なスポットとかはあるんですか？

井上：私はアラスカに行ったとき、アンカレッジから2時間半プロペラ機に乗って、アメリカの最北西端のノームというところに行ってきました。そこにはイヌイットの人たちがたくさん住んでいて、私と同じような顔をした人たちなんですけど、本当に美しいところで、冬はとても厳しいんですけど、その人たちはやはり辺境に辺境に追いやられてしまっていて、夢もなくてしまっていて、よく行くんですけどイエメンに行った時は、アラブの一番南の国ですけど全部砂漠になってしまっていて、食べ物も農作物も本当に少ななんです。それでアラビア半島の中では一番貧しい国なんですけど、全アラブ民族の心のふるさとって言われているところなんです。そこで何を見たかというのと、全てが砂漠化してしまっているけれど、かつては川に水が流れていて、椰子の林もあったところだったんです。それでそれを見た時に東京や関西、ドイツのベルリンとかと重なってくるんですね。かつては美しくって人々にとってかけがえのないものだった自然が、時を経たのを見るとじゃあ自分は何を表現できるかって思っ、でも辺境に行くことが好きなので、辺境を見ながら考えさせて頂いています。

— 白があることによって、霧のような幻想的なイメージになっていますね。

井上：はい、もっと奥行きのあるものもできてきます。

— あの、塩の作品があって、塩のものが巨大に並ぶって聞いたんですけど、それはどのような形のものなんですか？

井上：はい、このカーペットの上では無理なんですけど、何かを敷いて、自分でその上に塩を持って葉っぱをザーツと描いていくんですね。パフォーマンスなんですけど、それが自分の中のイメージとして、東日本大震災の時のものが流れていくイメージがあって、それをしていって思っていますので、あと例えばコンクリートの上だったら、全部塩を上下から霧吹きで水をかけて、時間と共に固めていくんです。自然のものを使って、塩は人の生命に一番近い大事なものだと思っていますので、それを使っ

勅使河原：なかなか辺境に行かないのでイメージがわからないんですけど、何かご質問やご感想はありますか？

— この白くなっている部分は描いているんですか？

井上：ブラシでゼラチンを塗っています。かなりこれをするのにテストテストなんですけど、ダークルームで何日も座ってやって、小さい布切れに何本とか、どの濃度でどれだけできるかとか、この大きさだどれくらいできるかと常に量ってないといけなくて、あと温度管理も必要ですね。

— 白があることによって、霧のような幻想的なイメージになっていますね。

井上：はい、もっと奥行きのあるものもできてきます。

— あの、塩の作品があって、塩のものが巨大に並ぶって聞いたんですけど、それはどのような形のものなんですか？

井上：はい、このカーペットの上では無理なんですけど、何かを敷いて、自分でその上に塩を持って葉っぱをザーツと描いていくんですね。パフォーマンスなんですけど、それが自分の中のイメージとして、東日本大震災の時のものが流れていくイメージがあって、それをしていって思っていますので、あと例えばコンクリートの上だったら、全部塩を上下から霧吹きで水をかけて、時間と共に固めていくんです。自然のものを使って、塩は人の生命に一番近い大事なものだと思っていますので、それを使っ



庭の花々

勅使河原：えーと、前回まではガラスケースでの展示ではなくて、ストリートに見られて作品にもっと密着できたと思うんですけど、この状態になってやっぱりちょっと雰囲気も変わるし、今回のテーマに対して良くなったり、そうでもなかったりあると思うんですが、そのあたりを含めて一言どうぞ。

塩野：はい、このケースに入ってたというのがたまたま、他に人がいなかったのじゃあ仕方なく…って感じだったんですが、入れてみたらかなり引きがあるんで、遠くからでも見ることができていうことが良かったなって思います。

見た通りの梅なんですけれども、今回の梅っていうテーマを頂いた時に、皆で決めたいんですけどね、青梅で梅が大変なことになってしまったら、ここの青梅でも無関係ではないということだけね、確認できればいいと思います。だからと言ってね、むやみに施設を壊せばいいというわけではないんだけど、バッチングしてしまおうとどうも世の中の市議も、学芸員も皆権力者側につくようなご時世になっているので、非常に危機感を持っていますね。

井上：はい、それはもう(日本に)帰ってくるたびに、ドイツとはやっぱり違うんですね。随分と変わってきていて危機感があります。

私の中でもファイナンスって、毎日うちの窓をぱって開けると、白梅と紅梅が庭にあるんですね、それはたまたま切られることはなく、1ヶ月くらい前に東京都の方が見えて検査してって大丈夫そうだったので、多分残ると思うんですね。本当にいつも外にあったんですけど「あってくれて当然」っていう梅の存在感みたいのが身近で、梅ってというのが植物として特に日本人には身近なものだと思うんですね。生活の中に自然に入っているし、食べたり飾ったりして、いつでもそこにあって欲しいものとして、今のところ開けたらそこにあるっていう安心感もあって、今回は紅梅、白梅であるがままの姿を見せたいなって思って作りました。こちらの中には紅梅の剪定した枝を抽出して採った色も入っています。

勅使河原：どれですか？

塩野：あ、こちらです。これだけではないんですけどね、隠し味みたいに使っています。梅から頂いた一つの色っていうものを、表現の中に混ぜてあげるっていうのが私の中では楽しいことだったし、ずっとここの中に残っているのが嬉しいことかなって思いますね。

勅使河原：やっぱり梅っていう植物のテーマを頂いて、例年以上に完成度が高くなっている気がするんですが、それはこちらの見誤りでしょうか？

塩野：そうですね。やっぱり楽しかつ

たし時間があるのでね、もともと大好きなもので取り組みやすかつたっていうのはあると思います。真ん中の作品は、引いて見て頂くと梅鉢の形なのがお分かりかと思うんですが、それを白抜きでやったっていうのは、もしかしてその梅がなくなってしまう後でも、多分私の庭は変わらずに、とても元気な草木が茂って、小さい生き物たちも変わらずに庭仕事をしてくれるんじゃないかなっていう思いもあって、白抜きの梅鉢の形の中でも皆が元気に活躍している姿を表現したかったので、こういう風にしました。

勅使河原：そうするとこの作品は、梅が切られたことを大震災に例えると、震災以降になる、でこの形で世の中に残るんだってことを言えるかなって思いますね。

塩野：ああ、だからその何かも無し無くなっちゃったとしても、その後元々ここにあったナナカマドにしても、ミモザや木苺にしても、まだまだうちにたくさん元気な生き物たちはいっぱいいるぞ！っていうね、そのままいつまでも元気で生きていくぞっていう気持ちが大切かなって、いつも身近なものを描いてるんですけど。小さい昆虫とか油虫とか、ダンゴムシもいるんですけどね、そういう小さいものがなければ私たちは生きていけない、生態系のピラミッドじゃないですけど、その中で私たちは生きていくっていうのを感じるので…。

勅使河原：先生にとっては、庭のト

カゲも油虫も全部含めて、青梅の文化再生というかね、それを守っているという感じがこの作品になるんですね。

塩野：土から生まれたものは大切ということですよ。

勅使河原：すごいお話でしたけれど是非どなたか、私の方はこうだというのを聞かせて下さい。

塩野：あ、ここにある型紙はこれを作るために紙を切り抜いて作りました。淡紙っていうんですけど、これは6分の1の型で、6枚360度になるように、角度を計算しているんです。今までこうやって

勅使河原：そうですね、でも絵描きさんって言うかアーティストの日常ってさ、今日描けるものは今日しか描けない、明日は変わっていくっていうのもあるからね。それがより植物という姿で与えられてくるっていうのがあるんですね。

塩野：その時の出会いかなって思います。これで型紙を5枚同じものを繰り返し返し置いて、これができているんですね。これは作品の一部を持ってきたんですけど、どうやって作るのかってよく言われるので、この型紙を使って糊を置いて、上から染料を足して、あとは重ねて最後に糊を剥がすっていうふうに、何百年も前から伝わっているやり方です。

勅使河原：ご質問なければ…あ、ありますか？

—はい、一番端っこの梅から抽出したっていう色が少し入った作品ですが、梅だけで染めるとどうなますか？

塩野：もう少し茶色になります。ただ紅梅なので赤みがかかっていて、白梅と紅梅では切った枝の色でも全然違いますから、季節によっても本当に微妙に違います。例えば3月と10月の枝は全然違いますし、植物染料ってそういうもの

なんですよね。春先と夏でよもぎから取る色もそれぞれにこう、柔らかくて明るい命が生まれたばかりの春先の色と、充実して成長して固くなった葉っぱの色とは全く違いますね。

勅使河原：いつ採るかは大事ですね。

塩野：そうですね。逆に言うと同じ色は絶対に作れないです。何月何日に採ったから、じゃあ来年も何月何日に採れるかって言うと全くそれはできないので、頂いたその時の色が、一番大切なその時の色だなんて、一期一会って言いますかね、出会いかなって言うふうに考えていますね。

勅使河原：そうですね、でも絵描きさんって言うかアーティストの日常ってさ、今日描けるものは今日しか描けない、明日は変わっていくっていうのもあるからね。それがより植物という姿で与えられてくるっていうのがあるんですね。

塩野：その時の出会いかなって思います。

勅使河原：はい、その瞬間をいかに大事に生かしきると、共通問題ですね。

塩野：そこが面白いですね。

布に包まれた女神

勅使河原：一目で肝心のご本尊がくるまれている、という衝撃的な作品ですけども、ご説明をお願いします。

伊藤：先ほど勅使河原さんと下でお会いしてね、お話ししたら「寡黙な作家の人ほどいい作品を作るんだよね」って言ったので、寡黙になります(笑)。

勅使河原：いや、いい作品じゃなくて、「饒舌な作品」って言ったんですよ。

伊藤：まあ確かにね、先ほどから皆説明していて、言葉を喋ると少しづつ自分の感覚とずれてくるっていうのが常にあってね、なかなか説明しにくいというのはあるかと思っています。どういう状態でどんな思いで作ったんですか？なんて言われるとね、それはだから見た方の感じでもらえればいいかと思えますけれど。先ほど墨のところ、黒ということをおっしゃってましたよね。これも2つとも全部一番最初は真っ黒です。夜叉玉って言うハンノキの実の染料を塗って、すると真っ黒になるんですね。それから始まったんです。途中で荒彫りしてからね、真っ黒にしてからそういう風にするんです。これもそういう風になってますけどね。

勅使河原：この壁の作品(「宇女神(梅)」)を拝見すると、今回の「梅」っていうテーマがそんなに意識しなくても心の何処かにあって、それが「う、女神だ」っていう感じで、宇女神になっていくというように私は感じたんですが、タイトル通り梅の女神なんですか？

伊藤：まあ、宇女神の「宇」が宇宙の「宇」になって、全部それを含めての形なんですけど、だからそれでどうしても梅という形にしようと思って、手を加えてここに梅をはめ込もうと思ったんです。それで手が向こうにこうなって、こう梅の木をはめ込むと説明的になるので省きました。ないほうがいいかと思ってね。それで色々変わってきてこんなになったんですけどね。

勅使河原：一目で肝心のご本尊がくるまれている、という衝撃的な作品ですけども、ご説明をお願いします。

勅使河原：やっぱりね、伊藤さん独特の縦長の造形に変わることによって、神々しさっていうかな、普通人間が女神になっていると

いう、それがね、非常に納得できるし、しかも足先見るとね、もはや地上に下りてないですよね。天に登っていく姿かな？って…

伊藤：それか下りてくるか、どちらかですよ。

勅使河原：やっぱり女神は天に昇って上から何かを語りかけてくるっていう感じがあって、それはすごく納得のいく造形ですよ。赤いところは梅干しの赤…というのはありえない？

伊藤：(笑) じゃあ青色は？

勅使河原：青はちょっとわかりませんねえ…。

伊藤：はい、だからこれも色々色は変わっています。こっちが青になってからまた赤くなってきて、向こうはもうちょっと鼠色っぽかったんですよ。それがだんだんだんだん青くなって、青の前にはもうちょっとグリーンになってましたもんね。それから青に変わっていったんです。

勅使河原：神像だから、衣装はできるだけ簡素というか、あんまり華美にならないで、こういうセミヌードでぴったりちょうどいいかなっていうのがありますね。

伊藤：こっちもヌードです。見せてません(笑)。

勅使河原：これ、覆ったのは…大丈夫なんですか(笑)。伊藤さんの作品っていうのは元々艶っぽいところがありますよね。色気というかね。

伊藤：本人はないんだけどね。

勅使河原：いや、本人じゃなくて作品の話です。それが包むことによ



てやっぱり意識されてくるというかね。秘匿されることで逆に見えてくるって感じがありますよね。

伊藤：はい、多少それは狙ってますけれども、それが相手に伝わるかどうかは別にしてね。

勅使河原：あの、これはこの上の人型らしい像だけ包んでもだめだと思いませんか。下の足まで全部

伊藤：はい、うちの壁です。100年以上前のです。
勅使河原：あ、ご自宅ですか？これが出てくると、その像がやっぱり時代というか、長い時間の経過を包まれていくわけですよ。そういう点ですごい効果がありますね。

伊藤：はい、うちの壁です。100年以上前のです。

勅使河原：あ、ご自宅ですか？これが出てくると、その像がやっぱり時代というか、長い時間の経過を包まれていくわけですよ。そういう点ですごい効果がありますね。

伊藤：そうですね、台をつけたかったんですけども、これだけの大きな板はありませんね。まして新しい綺麗な板でもしょうがないので、たまたま置いてあったこの板を組み合わせて使ってみよう

と思って、まあ私もこういう木を扱っている者ですけど、こういうもので作品ってなかなかできない状態ですよ。それでその上に乗せてみようと思って、何枚か重ねて乗

せたら良かったんだから、こういう風になったんですけどね。

勅使河原：これはね、やっぱり並べてみないとこういう表現があるんだって気がつかないし、作家の発想力というか、獨創性ですね。すごい効果が出ていると思います。こちらの方の作品でいうと、この台つ

伊藤：はい、うちの壁です。100年以上前のです。

伊藤：いや、光背というかね…。

勅使河原：光背じゃないんですか？

伊藤：仏像と違いますからね。

勅使河原：ああ、神像ですからね。

伊藤：あの、この間もお話ししましたけれど、金剛盤というのが私の中にありましてね、密教でね、三鈷杵とか独鈷杵とか言うもの、いわゆる真言密教の中で、御修法会の中で使われる法具を乗せる台の形がものすごい綺麗なものがあるんです。それがずっと頭の中に引っかかっていて、その形のものをこうやって自分の中にデザインして、これもそうですけどね。金剛っていうとダイヤモンドですけど。

勅使河原：ええと、こっちで勝手に先生と2人で喋ってしまってます。ご感想なりご意見なりどうぞ。



— 最初、くるんであるものを取っていき、出てるものをくるんでいくと伺ったんですが、それはやめたんですか？

伊藤：まだわかりません。包んだままで終わるかもしれないし、解くかもしれない。美術館に何度か足を運んでから決めたいと思います。それくらいでも構いませんよね？

— 包むことの意味を知りたいです。どうして包んだんですか？

伊藤：そうですね。包むというのはこの間もお話したかと思うんだけど、包んだ形のものがおぼろげながら見えるっていうのがあるじゃないですか？ダイレクトに見るわけじゃなくて、想像してみるというか、想像を掻き立てるといふか、そんなものが多々あると思います。

それで、私が仏像で大きいものを本尊なんか持って行った時に、くるんだ状態で持っていきますよね。その状態で須弥壇（仏教寺院で本尊を安置する場所）に置いて、住職を始めいろんな人が来て、これからどんな像が出てくるのかということがあって、それでそのままにしようと本当に「これはどんな像なのか？」って色々想像を掻き立てる。でも開けて「ああ」って驚く場合もあるし、「ああ」って落ちる場合もあるかもしれないけれど、「想像力を掻き立てる」っていうことが大事なんじゃないかと思

うんです。自分なりにイメージできますよね？ こうやって作品をこれからダイレクトに受けるわけだけども、ダイレクトに受けなくて見えるわけですよね。まあそこらへんのところを見せたいということです。

勅使河原：それから、私の方から余計なこと言うと、包むってこと言うよね、クリスト（ブルガリアの美術家）の作品だとクラフト紙で包んじゃうわけですよ。そうすると、荷物になるね。だけど伊藤さんの場合はクラフトじゃなくて白布で包むから、神像になるという、そういう違いがありますね。

伊藤：確かにね、こういう仏像みたいなものは必ずさらしてやっています。

勅使河原：ヤクザっぽいけどね。

伊藤：腹巻きするとね（笑）。

— 封じ込めるとかの意味合いもあるんですか？

伊藤：それもああるね。あるかもしれない。

— 見られない場合もあるんですかね、完成してるんですか？

伊藤：はい、自分では完成してると思っています。これ以上手をつけられないところまで手は加えたくはないです。

— 見たいですよね。気になります。— 梅のやつは見せてもらいましたよ。— えっ、見たんですか？— 設置の時にね。— ああ、設置してから巻いたんですか？

伊藤：いやいや、こっち来てからもう少し形良くしましたよ。

— いいなあ、すごい気になって来ちゃいました。（笑）— ちゃんと作って展示して、誰も中を見られないまま終わるっていうのも面白いですね。— それは思惑通りなんですか？

伊藤：いや、思惑っていうか…まだわかりません。開けるかもしれないし。

勅使河原：やっぱりね、この階の、主要作家がここまで冒険する、新しい試みをやるといふのがね、感動的です。やっぱり視覚的に、やってないことをやろうとかね、ドキッとさせようとかそういう企みが無くなると、危ないですよ。それを自ら身を切る感じでやっていただきたいと思います。素晴らしいです。

伊藤：そう、できるだけ美術館とコラボにならないようなね（笑）。

勅使河原：美術館もさ、管理してる人なんかは役所としては末端に近いんですよ。だから非常にかわいそうで、そこを攻めて問題が解

決するわけじゃないんで、攻めながら引いて、温かく支えつつ、また攻めるという感じをお願いしたいですね。他に何かありますか…先生の方からは？

伊藤：いや、もう十分です。

梅の花漂う空間

勅使河原：では最後…あ、まだ下の1人残っていますね。では先にこの階からいきましよう。では、そもそも「梅に捧げる」というテーマは元々杉本先生が考えたんですかね？

杉本：いえ、違います。

勅使河原：あ、そうですか。でもそう思わせる、そのものズバリ梅の作品だと思っんですけど、これは梅を描いてるんですか？

杉本：そうですね。形を変えてだんだん昇華されていって、花一輪ずつに念頭を置いて幹やなんかもね、そうしたらだんだんこうなっていましたね。

勅使河原：あの、木よりも小枝から、小枝から花、花から梅の生みたいなの、そんな流れでした。そのあたりを描いた順番に即してというか、お話頂けますか？

杉本：順番ってこともないんですけど、前回6月に個展をやった時、水がテーマだったんですけど、それもこういうアクリル板に貼るような形の展示で、ちょっと揺れるような形で、それは奈良と東京でやった展示会で発表してきたんですけど、今回梅もそういう形でやってみたいなということで、空間の中に浮かばせて、どんな風に見えるかなということ、大きい花にしてみたりとか、いろんなことを考えたり、形がないようなものにし

てみたりとかしたんですけど、ほぼ自然に花をスケッチするようつもりで、写経するようなつもりで一輪ずつ描こうと思って描いてみました。それが線で描いてみたり、壁を超えてみたりとか、それをくくってみたりくらなかつたりいろんな形で表現してみようと思いました。

勅使河原：墨で梅を描くというだけで、これほどのバリエーションができるというのがね。

杉本：もつとあると思うんですけど、この空間だとこれくらいかなと思っして、時間的なものも7月から2ヶ月くらいですかね、実質的には20日間くらいしか時間がなかったんで、これくらいの点数で終わるしかないんじゃないかなと思っって、あんまり突拍子も無いもので並べるとまとまらなかった気もするのでね。

勅使河原：なんかこうやって数並べられると、先ほどの伊藤さんは梅から女神に行ったのが、杉本さんの場合は梅から梅の生に行く、というね。違う姿が浮かんできますよね。あの黒地にしたのは、なんて呼ばばいいんですかね？ 陽画と陰画なんてことはないですよ。

杉本：これは別にどうってことはないんですが…（笑）。

勅使河原：そうですね。これがこうポンポンと点在しているところが実に効果的です。

杉本：これはただ、ドーサで描いただけですから、ドーサで描いて裏から墨で塗ればマスキングしてますから、白抜きになるだけの話で別にそれこそ白衣の紋章なんか白い字を書いているようなもんです。別に新しいことじゃなくて普通に古典（美術）を勉強すれば普通にできます。そういうドーサや墨の使い方



とか、あと紙ですね、紙や墨の選び方や組み合わせでいろんな表現ができると思います。

勅使河原：とにかく1点ずつ見ると、本当にあの、風合いが違って全然別の花を別の屏風で描いているように見えるしね。

杉本：ですから今度はたまたま、例えばこの黒いやつなんかは、裏を見ると真つ黒なんです。あとドーサを引いてないで描いてたらドーサをかけるとか、間に入れるとか、墨の濃度を変えとか、そういうことだけ、水と墨と膠だけでやっていますね。

勅使河原：こう、いま（作品が）揺れていますけど、冬は（空調の風で）揺れますよね。

杉本：また扇風機でもこうなりますね。

勅使河原：日本の伝統的な世界で、こういう見せ方っていうのはほとんどやられていないんじゃないですか？

杉本：そうでもないんじゃないですか？ わからないけど今は多いから。こういうインスタレーション風なものね。

勅使河原：そうですね。私はほとんど見かけたことがないんですが…（美術）を勉強すれば普通にできます。これもすごい冒険の一つだと思っますね。水墨やっておられる

方は他にいらつしゃいましたっけ。杉本先生お一人ですか？ …まあでも、水墨やっている方もまた、この作品独特の疑問とか、質問とかあるかと思っますけど…。この中で一番苦労したというか、難しかった点はどこですか？

杉本：そうですねえ…まあ、1点ずつ全部形が違うんですよ。だから1点の中でも、花びらを描くときには滲みを生かして描いて、その紙で尚且つ、枝は絶対に滲まない濃い墨で、線描だけで描くということをして、こういうところもこすり付けるとか、こすっても滲まないようにするとか、それでいてこの滲む花の中に、おしべとかね、そういうのを滲まないようにするとか、薄い紙なのでそれが難しいですね。これ張り込んだり、持ち上げたり引引っ張ったりするだけで破れちゃうんです。それがちょっと面倒でした。

勅使河原：花の表情がね、これとこれではもう全く違いますよね。

杉本：一輪ずつ、スタンプのような絵にはしたくなかつたのでね。

勅使河原：これだけ花が密集しても、ひとつひとつの花に個性があつて、別の方向を向いているような感じもするし、やっぱり個が集まってひとつの絵を作るっていうことの凄さですね。

杉本：梅の花や木自身がそういう

力を持っていてね、本物も一輪ずつ表情はあるんだけど、遠くから見ると1本の木の花にしか見えないうんですけどね、実際は一輪ずつはそういう力を持つてる、桜も同じですよ。

勅使河原：描いていて、日本人が桜以上に梅に惹かれて行つたっていうことはわかります。なんでそうなのかとか…。

杉本：梅から始まって桜になって、また梅に戻つてとかいろいろ変遷があると思うんですよ。それは桜っていうのも特に脚光を浴びたのは山岳信仰のね、山伏やなんかの修験の世界で、大権現の、役行者の1300年前の桜から始まるんですよ。桜自身はね。

勅使河原：役行者と桜が関係あるんですか？

杉本：そうですね。役行者が山の上で大権現を見たときの姿を留めた木が桜で、その木に彫つたわけですよ。それが一番最初で神木になって、吉野に桜の木を植えるようになったんです。

勅使河原：じゃあ最初はこう、片足上げて…？

杉本：そうですね。それで岩のところから出てくるんですけど、そこから始まるのが、桜とその日本との因縁の話ですが、梅はそれ以前からあるんですよ、まあその





ときは今のソメイヨシノみたいな桜
じゃなくて、山桜がありますけどね。

勅使河原：そうですね、やっぱりこ
ういう作品見ると、今回の展示
は青梅市としては、全部収蔵する
必要がありますね（笑）。突然突
拍子も無いこと言うけれども、しか
もちゃんとお金払って収蔵する必
要があると、これはどこかで言いま
しょうね。この間市長さんが来た
時言えなかったから…。
でもこの作品、やはり青梅の「梅
に捧げる」と言う展示会に出ている
ことが、非常に一期一会じゃな
いけど、意味が深いですよ。青梅
の人にとって梅の存在っていうのは、
ちょっとよそ者にはわからない
くらい大きいと思うのでね、そう
いうところが展示会に結実した、稀
有な例ですね。素晴らしい作品で
す。ご意見どうぞ。

— ああ、立体でその表現するときに、
この梅の香りっていうんですかね、そ
れを表現したいんだけど、もうほと
んどね、香りっていう領域になると難
しいと思うんですね。ところがこうや
って墨で描かれると、香りが漂ってくる
感じがしてね、羨ましいです。

勅使河原：やっぱりあの、和紙と
墨という儚い、ちょっと触っただけ
で破けてしまうという儚さと、梅の
一輪二輪こう、ほとんど色が無い
ような儚さっていうのがかなり相性
がいいとかね。

杉本：色を最初は考えたんですけ

どね、全部省いてってやっぱりそ
の普遍的な意味では、もう墨だ
けにしていこうと思って、このテー
マにはこれでいこうって、描いたん
ですね。

勅使河原：絵で香りを出すってこと
になると、墨以外ないんじゃない
ですかね。

杉本：そんなこともないんじゃない
他の作品もあるでしょう。

勅使河原：香水はダメですよ（笑）。
— ああ、私もこの墨、多分何本も
墨を磨って、いろんな墨を使われ
ているわけだけだ…。

杉本：これは一本ですね。
— 全部一本ですか？

杉本：そうですね。これも明墨って
いう明の頃の墨なんですけど…。
— じゃあその濃さとかでほとん
ど…紙も一種類ですか？

杉本：はい、同じ種類ですけど紙
もちょうと工夫したりとか…。

— 私はもつと何本も使ってらっしゃ
るのかと思ったんですけど…。

杉本：違うのあるかは調べました
けどね。

— 色はでも、微妙に見えてくるじゃ

ないですか、梅って白梅から少し
薄ピンクになったりとか、ちょっと黄
色やグリーンっぽかったりとか、な
んかこう繊細な色が、墨を使うこ
とによって見えてくるっていうのはあ
るなって思いますね。

— 梅林の作品なんですけど、この
展示の仕方っていうのはこれまで
もやってこられたんですか？
杉本：いや、こういう花でこういう
展示は初めてです。
— 何かアイデアっていうものは？
杉本：この前に水でね、そういう
展示会をしたんですけど、花で
やるときはね、梅林の梅の花が
夜咲いてる時見たのが、雪が積
もてるようにブワッと見えたんで
す。そういうイメージを絵にしたい
と思って、その時に幹を描くと雪
の感じがちょっと弱まってきたので、
できるだけ枝は少なめにしたりと
か、枝を線だけで描いてみたりと
か、なので黒い面積を少なくして、
全体を締めるための黒いバックの
パーツを作って入れてこう考えて
構成しました。

杉本：後はやっぱり紙の力とか、
硯もその、使う硯によって色の降
り方が違うので、僕は歙州硯とい
うのを今回使っていますね。同じ
墨でも硯との相性がありますか
らね。

勅使河原：見ると香り立ってくるよ
うなね、他に何かありますか？

— はい、これを描く前にスケッチや
素描、デッサンは何枚くらいされた
んですか？

杉本：それは30年ぐらい（笑）。
青梅に越して毎年毎年咲くたびに
描いて、頭の中に入ってるので、だ
からスケッチを見て描くってことは
一切なくて、思い出しながら描きま
したね。だから後はもう手が動い
て、下描きがあるわけでもなんでも
なくて、パツパツ置いて、その
間にまたこういう蓄を入れてとか、
ここに花を入れてどういう枝ぶりに
しようとか、だからちょっと枝を描
いてから花を描くのもあったり、花
を描いてから枝を描いたりとか、も
うそのときその時のノリで描いてる
んです。

勅使河原：完全に自由自在になる
テーマなんですね。

杉本：そうですね。

— 梅林の作品なんですけど、この
展示の仕方っていうのはこれまで
もやってこられたんですか？

杉本：いや、こういう花でこういう
展示は初めてです。

— 何かアイデアっていうものは？

杉本：この前に水でね、そういう
展示会をしたんですけど、花で
やるときはね、梅林の梅の花が
夜咲いてる時見たのが、雪が積
もてるようにブワッと見えたんで
す。そういうイメージを絵にしたい
と思って、その時に幹を描くと雪
の感じがちょっと弱まってきたので、
できるだけ枝は少なめにしたりと
か、枝を線だけで描いてみたりと
か、なので黒い面積を少なくして、
全体を締めるための黒いバックの
パーツを作って入れてこう考えて
構成しました。

— 描かない部分があることに
よって、描いてない部分が見える
ように思っていますね。ぼくは
この展示見に来たの2回目なん
ですけど、昨日来て作家の皆さん
のレベルというか、「すごい！市
立美術館でこんなことやっちゃう
んだ！」って思って、200円以上
払わなきゃいけないんじゃないか
なって思うくらいレベルが高くて
びっくりしました。ありがとうございました！

梅の切り株と再生

勅使河原：平井さんの作品はで
すね、石彫の皆さんは割と抽象化
した梅を象徴的に扱われるだけ
で、平井さんの場合はストレートに
梅をやっていますね。

平井：ええ、それくらい現場を見
たら、印象が強かったんです。最初
いつも作ってる感じで考えて出し
てくればって言って頂いたんです
けど、どうしようかなって思って、
それで青梅市は梅の木を切っちゃ
たんだって話を聞いたんで、その
吉野梅郷の公園にとりあえず行
てみようかなと思ったんです。

見た時にとても綺麗な丘で、確
かに木が1本もなくて、だから最
初の梅が生えてたっていうイメ
ジが無かったから逆にっていうの
もあるんですけど、とりあえず切
つてあるかなってイメージで
行ったんですけど、そしたら全然
無くて、行くとただ切ってるわけ
じゃなくて、チェーンソーでまた
それを縦横に色々刻印するかの
ように、向きとか間隔とか違
うんですけど各木に刻んで、それ
がすごく印象が強くて。これはこ
この梅の木だからやったのにな
っていうので、ずーっと登ったり
降りたりして、全部じゃないけど
ほとんどの切り株を探して回って
行ったときに、最後の1個だけ、
切って3年くらい

いだそうなんですけど、梅の木
がちよと生えてたんです。本当
はそれは良くないってこの間お
聞きしたんですけど、それくらい
生命力が強いんだってっていう
ので、まあこの通りにはなって
ないですけど、その強さみたいな
のを表現したかったのと、あと
切られて他の菌が入ってきて、
キノコとかが生えてきちゃうの
もあって、命のバトンタッチ
みたいな感じでした。

あと本当にもう、朽ちちゃって
中が空洞になるのとかもあって、
空洞になることによってその形と、
また逆に中からまた違う芽が
出てくるんだらうなって、す
ごく木自体が肥やしになって、
次の命が繋がってるみたい
な。

それであとなぜ周りの石を残
したのか、上のだけで表現した
かっていうと、この石自体の歴史
も残し

ておきたかったっていうのもあ
って、これはこの外の平べった
いやつの上の部分で、2つでま
ず割って作ったんです。もう1
個は薄べったい、他で作った残
りのかけらを頂いたやつを入れ
させてもらって、もう1個は30
cm角の立方体の、サイコロ状
の石があったんですけど、それ
を円切りで上の部分は取って、
それは今御岳山の久保田さんの
家のところに正面で使わせて
もらってる作品の、外側の石の
部分なんです。石って一番よく
割れるのは胴割り（2つに割れる
こと）だと思うんですけどリン
ゴなんかでも、片っぽで割ろう
としても割れないじゃない
ですか、真ん中に指突っ込んだ
らパカって2つに割れる、だから
なるべく同じ量同士だとよく割
れるっていうのがあるんです。

あと、これを作るとどうしても
木っ端が出ちゃうんですよ。だ
からカッターをなるべく使わ
ない、使うときにして大きく割
って、使おうっていうのもあり
ます。

勅使河原：いや、この切り株
をね、石で彫ってしかもこの人
と木の戦いまで現してしまった
っていうのがね、すごい良い
ですね。観察力とか造形力とい
うかね、すごいものがあります
ね。

平井：埼玉の越生の方に親
戚がいるんですけど、越生の
梅林があって、見た時にやっぱ
り木の枝を巻いて置いてあつた
もんだから、多分ここでも切
たら枝とか幹とか結んだりして
るのかなって、それを構成して
作ったらまた面白そうかな
って、出かけて行ったら全く
なくて、切り株の印象がす
ごく強くて、それで今回作ら
してもらおうかなって思
いました。

あと4つ中に入れちゃうと、
最初から外の空間もす
ごくいいので、目線がここ
から外に向かって全体の



空間を、目線が外まで広がって
頂ければいいかなって思
いました。あと今日ちよ
ど雨の日なんですけど、
同じ石でも石って水に濡
れると、深みっていうか色
合いが変わってくるんで、
そういうのも見ていた
だけだったと思います。

勅使河原：やっぱりあの、平
井さんの梅に対する愛情
というか、執着というか、
そういうものがこう4つ
並んだことによって非常に
ことう伝わってくるし、
それが自然の中に広が
って、また新しい造形
が出てくるって感じ
だね。ありがとうござ
いました。

えっと、最後ですけど
質問やご意見がありましたら
どうぞ。…いいですか？
ではどうも長時間お
付き合いました。

伊藤：あ、あとね、この人
達（展示処青ジャムのメン
バー）が今御岳山の方で
展示しているんですけど
ね。

勅使河原：あ、そうですね。
御岳山の上の方で、今日
はリフトが止まっている
のかな？

長倉：あ、今日は最初から
お休みです。土日と祝日
しかやってない

全員：ありがとうございました！

ので。**勅使河原**：阿部さん、
鈴木（ひろみ）さん、山
口さん、平井さん、池田
さん、長倉さん、鈴木
（寿一）さんの作品が上
に行くと見られます
ので、多分作家もいつ
もいますよ。

鈴木（ひ）：そうですね。
誰か2人はいるように
しています。

勅使河原：質問できる
と思いますので、是非
行ってみてください。

一同：よろしくお願
いします！

勅使河原：それでは
どうも、ありがとうございました！

松島：長い間ありが
とうございました。また
今日はあいにくの雨と
お彼岸が重なりまして、
少し出足が鈍ったよう
ですが、平井先生の作
品が雨に当たって風情
があるといういいお話
が聞けました。11月
まで開催しております。
本当に今日は勅使河原
先生、どうもありが
うございました。今一
度、どうぞ拍手をお
送り下さい。



MESSAGE メッセージ

「青ジャム」という奇跡

「青梅アートジャム」では毎回テーマや、やり方が微妙に変わっていく。そのため参加した作家や展示内容を正確に伝えるのは存外に難しい。それでも彼ら相互のあいだには、和気藹々のアウンの呼吸とでもいったらいいのだろうか。

ある不思議な空気のようなものがある。これが結構重要なのである。私ものせられて、つい仲間内のギャグを楽しむように作品を眺めてしまうところがある。しかし、いざギャラリートークをやってみると、まったくもって別の顔が立ち

現れてくる。自らの展示物を語る言葉にも、長い逡巡のときを滲ませるアーティストが少なくない。それというも墨、木、石、鉄、陶、布、版、写真とそれぞれの素材を使って、これまで誰もやってこなかった造形へと果敢にチャレンジ

する、いまのアートの姿が痛々しいほど露わになるからだ。この極限まで純粋な美の競い合い、励まし合いこそが、私には「青ジャム」という奇跡の本質だと思えてならない。

美術評論家
JT-ART-OFFICE 代表
勅使河原 純

ご挨拶

今回私たちはこの地、青梅の歴史と文化そして何よりも美しい里山を古来より彩ってきた「梅」に焦点を絞り込み、制作と企画を進めてまいりました。また、前回より美術館展示

は隔年のビエンナーレ形式となり、昨年のワークショップ企画のみとは違って、期間もボリュームも大幅に拡大しています。青梅にとって特別の存在でありながら、昨今のウィルス発

生による伐採と再生への道のりを目の当たりにする中で、この「梅に捧げる」のテーマを多面的にとらえた作家一人一人の独創的な表現と御岳山頂での多彩な企画は、訪れる全ての方々に印象深く受け

止めて頂けた事と思います。これを足がかりに、今後も更にご青梅の地に根ざした表現イベントを展開し続けたいと願っております。

青梅アート・ジャム 伊藤 光治郎

Special Thanks ご支援御協力心より感謝申し上げます。

主催

NPO 文化交流機構「円座」
青梅アート・ジャム実行委員会

共催

青梅市
青梅市教育委員会
文化庁文化交流使の会

助成

青梅市まるごとアート支援事業
一般社団法人 青梅市観光協会

協力

JT-ART-OFFICE 勅使河原 純
社会福祉法人 埼玉医療福祉会 光の家療育センター
御岳登山鉄道 (株)
宗建寺
Dining & Gallery 繭蔵

撮影

橋本 憲一

記録誌制作

Studio Lesserpanda 坂内 ひろゆき
松島 美知子
山口 幹也
長倉 陽一
池田 菜摘

第6回東日本大震災 義援展参加者

青野正、新井達矢、阿部静、伊藤光治郎、池田菜摘、江見高志、音羽しょうこ、菊地順子、木塚和子、香月尚子、黒住和隆、黒田理恵、sio.、塩野圭子、白井麻衣子、杉本洋、鈴木麻美、鈴木龍郎、鈴木寿一、鈴木ひろみ、高崎友里香、田中毅、谷えり子、鳥居葉子、中島敏明、長倉陽一、平井一嘉、橋本のぞみ、深田絵理、藤浪瑛智、マダジュンコ、森本記子、山口幹也、ヤマザキユキ、山本伸之

会場情報

青梅市立美術館
〒198-0085 東京都青梅市滝ノ上町 1346 JR 青梅線 青梅駅下車徒歩 6 分
9:00 ~ 17:00 (入館 16:30 まで)※月曜日休館 TEL:0428-24-1195
入館料:2 階 展示室 大人 200 円 小中学生 50 円
<http://www.ome-tky.ed.jp/shakai/bijutsu/>

武蔵御嶽神社
〒198-0175 東京都青梅市御岳山 176 TEL:0428-78-8500
JR 青梅線「御嶽駅」下車 → 西東京バス「ケーブル下行き」→ 御岳登山鉄道 (ケーブルカー)「滝本駅」→「御岳山駅」下車
<http://musashimitakejinja.jp/>

御岳登山鉄道 (株) 大展望台休憩所 2F
〒198-0175 東京都青梅市御岳山 17 TEL:0428-78-8121
<https://www.mitaketozan.co.jp/>

駒鳥山荘
〒198-0175 東京都青梅市御岳山 155
<http://www.komadori.com/>

西須崎坊 蔵屋
〒198-0175 東京都青梅市御岳山 142 TEL:0428-78-8473
<http://m-kuraya.com/>

御岳山荘
〒198-0175 東京都青梅市御岳山 123 TEL:0428-78-8474
<http://www.mitakesansou.com/>

町久保田
〒198-0175 東京都青梅市御岳山 156 TEL:0428-78-9039

お問合せ Infomation

NPO 文化交流機構「円座」 TEL 03-6321-3424 e-mail:enza@wave.dti2.ne.jp
〒158-0097 東京都世田谷区用賀 3-25-1